

正史を彷徨う

七章 三国志の時代（女王国と邪馬壹國）

森隆一

弁辰傳
弁辰與辰韓雜居亦有城郭衣服居處與辰韓同
言語法俗相似祠祭鬼神有異苑囿皆在方西其
濱盧國與倭接界十二國亦有王其人形皆大衣
服繫清長髮亦作廣幅細布法俗特嚴峻

倭人傳
倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑舊百
餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至
倭循海岸水行歷韓國東南東到其北岸狗邪
韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大
官曰卑狗副曰卑奴母離所居地島方可四百餘
里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無
良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千
餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴
母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有
田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘
里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行
不見前人好捕魚鱉水無深淺皆沉沒取之東南
陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨毓柄
渠軋有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來

(Wiki「魏志倭人傳」より)

はじめに

ここでは、三国志倭人条を主として魏の時代の倭を考える。魏志倭人傳と謂われているもので、正式には、三国志・魏書・卷三十 烏丸鮮卑東夷傳・倭人傳で、最後の傳を条に変えたものである。

まず、Wiki「魏(三国)」から魏の概略を見る。

後漢末靈帝の中平元年 184 に黄巾の乱が起きた後群雄割拠の状態となった。曹操が台頭し、献帝の建安十二年 207 に丞相となった。翌年有名な赤壁の戦いで呉に破れた。建安二十一年 216 に魏王に封じられた。曹操の子の曹丕は献帝から禅譲を受け、黄初元年 220 とした。

この後、司馬懿が台頭し、次男の司馬昭は元帝景元四年 263 に相国・晋公・九錫を下賜された。延康元年(建安二十五年)265 に司馬炎は曹奂より禅譲を受け、(西)晋を建て、泰始元年とした。

東夷に関しては、後漢末期、献帝の永漢元年 189 に公孫度が遼東太守に任じられた後、遼東以遠は公孫氏が領有した。子の公孫康は、建安九年 204 頃に楽浪郡の南部を割いて帯方郡を置いた。その後、景初二年 238 に司馬懿により滅ぼされ、魏の支配するところとなった。

三国志の撰者は西晋の陳寿(233-297)である。東夷伝のうちで成立が最も古く、また倭人に関する情報量は最も多い。ここに、有名な女王国への旅程が記されている。

三国魏の滅亡は265年であるから、滅亡後30年までに作成されたことになる。現在で言えば、昭和の時代を語るようなもので、陳寿の生きている範囲で、見聞きしたこと語る事が可能である。これより、三国志は信憑性が高いとされている。成立状況がこれに近いのは隋書であるが、この東夷伝は三国志に比べれば短い。

三国志は魏書・呉書・蜀書から構成されているが、帝紀があるのは魏書のみで、他の2書は列傳のみからなる。これより、陳寿は魏を正統の王朝と考えていたと考えられる。外夷が書かれているのは、魏書烏丸鮮卑東夷傳 1巻のみである。魏と接触した外夷はこれだけであったということであろう。これも三国の状況を物語っているのかもしれない。

正史の書き方からは、韓条の次には倭条が書かれるはずである。後漢書では倭在韓東南大海中 で始まり、実際倭条となっている。三国志では倭人在帶方東南大海之中 で始まり、倭人条となっている。一方、記事からは卑弥呼に倭王を授けている。これからは、倭国が存在したことになる。これを疑問としておく。

疑問 7.1. 三国志で、韓条の次は倭条のはずだが、何故倭人条か。

漢から魏、魏から晋へは禅譲であったため、魏王朝の記録は殆ど残っていたと推測でき、三国志の作者(群)はこれらの記録を見ることが出来たと思われる。これが滅亡後 15 年程で完成できたことの一因ではないかとも考える。編集期間が短いことから、執筆にあたって、全ての資料を見ることはできなかった可能性も考えられる。資料は王朝の記録と郡からの報告が考えられる。さらに、帯方郡滅亡時にその文書も都まで持ち帰ったことも考えられるが、この可能性は薄いのかもしれない。ここで、倭条の執筆時に、あるいは、校正時に、帯方郡の報告から、女王国への旅程表が見つかったのではないかと思う。

上の考察からは、倭奴国に対する作業仮説 1.2. と同様のことが倭国に対しても成り立つと推測する。

作業仮説 7.1. 魏の初期には、倭国は朝鮮半島にあった。その後、魏の時代に、倭王は日本列島に移った。

疑問 7.2. 朝鮮半島に、倭王の都する所としての邪馬台国の候補地を見付けられるか。

倭の移住に関しては、イングランド王国のノルマン朝が思い浮かぶ。

Wiki「ノルマン朝」では

ノルマン朝は、中世イングランド王国の王朝。1066年から1154年まで続いた。

1066年、フランス王国の諸侯であったノルマンディー公ギヨーム2世(ウィリアム)がアングロサクソン人王の支配下にあったイングランド王国を征服し、ウィリアム1世として国王に即位したことで成立した。征服王(the Conqueror)と呼ばれるウィリアムがノルマン人の後裔だったため、ノルマン王朝と呼ばれる。征服王朝のため、当初から国王による権力集中が完成していた。ノルマン朝の血筋はその後のイングランド諸王家にも受け継がれている。

中国の征服王朝でも同様であるが、ノルマンディー公がどの程度の規模の軍を率いて征服したかは興味ある。また、文献資料を用いずに、遺跡や遺物などのから、ノルマンディー公の征服を示すことができるかも興味ある。征服後、イギリスとフランスの間では百年戦争1337-1453が起きている。

7.1. 三国志の韓条

韓条の全体的な考察は後回しにして、倭に関連する興味ある記事を幾つか取り上げる。馬韓について、次の2つの記事は前章で取り上げた。

“辰王は月支國を治めている。”

辰王治月支國

“桓靈の時代の末に、韓と濊の勢力が強くなった。郡縣は多くの民が韓国に流入するのを制御できなかった。”

桓靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國

辰韓については、

“始めは6カ国であったが、その後12カ国に分かれた。”

始有六國 稍分爲十二國

始めの6カ国を12カ国に稍分したということだが、地理的には、南に6カ国が増えたとするのが自然と思われる。

弁韓は、始めに1回現れた後、弁辰となっている。卞辰と書かれたものもある。後漢書では、初めから弁辰としている。これも12カ国である。

弁辰の記述は何か混乱が見られる。区切りの書き出しは次である。

“弁辰はまた 12 カ国である。・・・弁韓と辰韓は合わせて 24 カ国である。大国は 4・5 千家、小国 6・7 百家、併せて 4・5 万戸である。その 12 国は辰王に属する。辰王は馬韓人から選ばれ、これが代々継がれている。辰王は自ら王となることはできない。”

弁辰亦十二

國・・・(風俗)(24 カ国のリスト) 弁辰韓合二十四 其大國四五千家 小國六七百家

總四五萬戸 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王

弁辰の話の中に 24 カ国のリストと 弁辰韓合二十四國 が挿入されている。24 カ国のリストには、弁辰〇〇国と弁辰が付く国と付かない国が半々である。もともと分かれてあったものを一つにしたかのような気がする。

風俗の中で

“その国は鉄を産出する。韓濊倭はこれを取り求めている。中国の銭のように市場では鉄で買い物をする。楽浪郡と帯方郡にも供給されている。” 國出鐵 韓 濊 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡が目につく。後漢書では、この記事を辰韓の項においている。

鉄を銭として用いるということは、そこそこの生産量はあったが、そんなに多くはなかったのではないかと考えられる。日本では古代の製鉄

遺跡が発掘されている。韓国で製鉄遺跡が見つければ、そこが辰国か弁辰の候補地となる。現状からは、当面この可能性は低いであろう。

作業仮説 7.2. 後漢から魏にかけて、朝鮮半島南部の国は、馬韓・辰韓・倭であった。倭の移住後、その構成部族の残った国で、国となったものが任那や加羅であった。また、邪馬台国は加羅にあった。

作業仮説 7.1 と 7.2 から、弁辰の記述における混乱は次のように説明できる。

三国志の作者は、韓条に続き倭条を書くつもりであった。ところが、完成の前に、帯方郡の報告書が見つかったのであろうか、倭は北九州に移ったことがわかった。しかし、倭の都(邪馬台国)の所在がわからなかった。倭として扱う予定の朝鮮半島の倭の跡地を弁辰とした。また、女王国への旅の報告書が発見されたので、これを地勢に加えた。

弁辰で鉄が産出していたことは注目される。この鉄が大倭王の経済的基盤ではなかったか。今のところ、韓国の範囲で製鉄遺跡が発掘されたという報告を見つけていない。鉄鉱脈の枯渇が北九州への移住の理由で

はないかと考えている。日本で、邪馬台国があったとされているところや近江京のあった滋賀県南部には古代の製鉄遺跡が発見されている。

地勢は後漢書と大筋は変わらないので、地図のみを挙げておく。

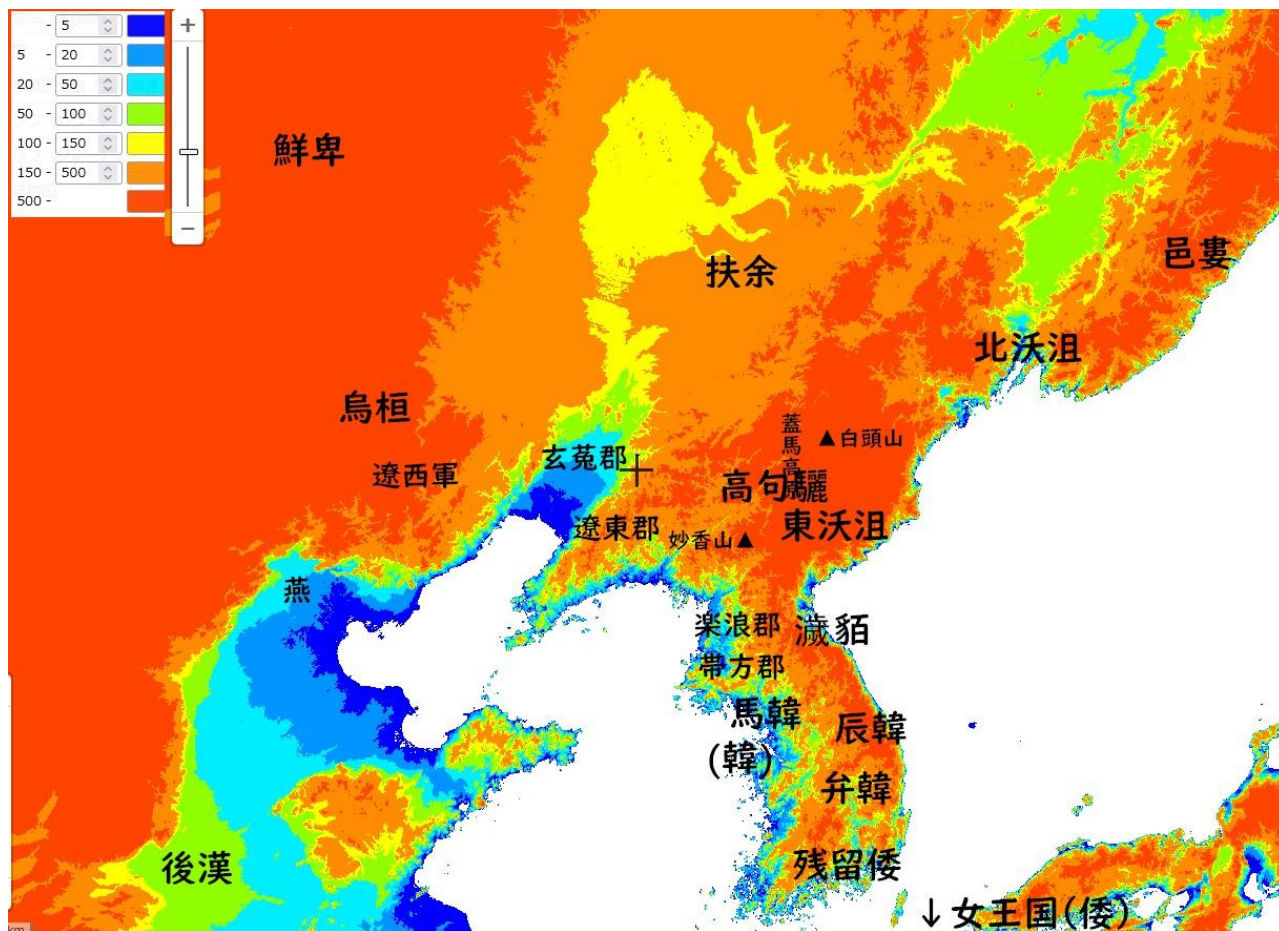


図 7.1 三国志の時代

7.2. 三国志倭人条の記事

三国志倭人条の記事を見ていこう。初めの地勢の部分は、楽浪郡が帯方郡に代わったこと以外は、後漢書とほぼ同じである。ここに、よく知られている「女王国への旅程」が書かれている。この後風俗についての記述がある。国勢では 自女王國以北 特置一大率 で始まる記事があるが、これは後で触れる。

この次の記事は

“その国はもともと男王であったが、七八十年のあいだ倭国では騒乱が続いた。暦年の攻防の後、卑弥呼と呼ばれる女性を共に王とした。鬼道を事とし、衆を惑わした。年は長けているが未婚で、弟が国政を補佐している。”

其國本亦以男子爲王 住七八十年 倭國亂 相攻伐暦年
乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼 事鬼道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國
である。後漢書の 桓靈間 倭國大亂 とほぼ同じ内容である。男子が男弟となっている。事鬼道 能惑衆 の意味がよくわからない。

コトバンク「鬼道」では

中国において、鬼とは本来死者の靈魂、幽冥の世界における靈的存在を意味し、天界、界を貫く原理法則をそれぞれ天道、人道というのに対して、鬼神の世界を貫

く原理法則を鬼道という。また、帝王の主宰する万神の祭壇の八方に設けられる鬼神の通路を文字どおり鬼道と称する。一方、巫覡などの行う呪術および国家非公認の呪術的宗教などもまた鬼道といわれる。後漢末から三国魏の時代にかけて、四川、陝西両省にまたがる一大宗教王国を築いた五斗米道教団の第3代教主である張魯は、主として符や呪水といった呪術的方法を用いて病人の治療を行い、その勢力を拡大していったが、当時の史書は張魯の教法を鬼道と決めつけている。

この次に、

“女王国は東海を渡って1,000里の所に倭人の国がある。”

女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種

で始まる文が書かれた後、記年記事が始まる。旅程の水行では渡海と書かれていないので、九州の沿海航行といえる。もっとも、関門海峡は渡海といえるか疑わしい。

記年記事の初めは景初二年の記事である。ここでは月を省略しない。

“魏の明帝の景初二年 238 十二月六月、倭の女王卑弥呼は、大夫難升米らを帯方郡によこし、魏の天子に直接あつて、朝獻したい、と言ってきた。郡の太守劉夏は、役人を遣わして難升米らを魏の都まで送って行かせた。”

倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都

“その年の十二月、魏の女王に返事の詔が出た。親魏倭王卑弥呼に詔す。：帯方郡の太守劉夏が送りとどけた汝の大夫(正使の)難升米、副使の都市牛利らが、以下を献上した・・・さて汝を親魏倭王として金印・紫綬を与えよう。封印して帯方郡の太守にことづけ汝に授ける。(倭国伝)”

詔書報倭女王曰：製詔親魏倭王卑彌呼：帯方太守劉夏遣使送汝大夫難升米 次使都市牛利奉汝所獻・・・今以汝爲親魏倭王 假金印紫綬 裝封付帯方太守假授汝・・・

景初二年 238 は司馬懿により公孫氏が滅ぼされた年である。

晋書では

“宣帝が公孫氏を平定した。その女王は使いを帯方郡に遣わし朝見した。そのあと朝貢を絶えなかった。”

宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帯方朝見 其後貢聘不絶

と簡略に書かれている。この公孫氏も面白い存在である。宣帝は「死せる孔明生ける仲達を走らす」で有名な司馬懿である。倭の女王が公孫氏を滅ぼしたことへの祝賀の使いを送ったのではないか。魏王朝、あるいは司馬懿にとって、北方の難敵公孫氏を倒したときに祝賀の朝貢があるのは喜ばしいことであったはずである。朝獻を願ったのは、魏の都にい

き、情勢を見極めることを目標としたいたのではないか。6月に帯方郡に着いた後、12月に詔勅がでたことになる。この間に必要なことは、都に問い合わせの使いを送り、許可が出た後、都に使いを送ることである。問い合わせは、遼東郡に居たと思われる司馬懿でよかったことは考えられる。

都からの日程に関しては Wikipedia「司馬懿」に

出征前、明帝に「反乱をどう平らげるか」と聞かれた司馬懿は「往路に100日、復路に100日、戦闘に100日、その他休養などに60日を当てるとして、1年もあれば充分でしょう」と答えており、事実、この通りに軍を動かし、公孫淵を破ったのである。

と書かれている。これは晋書・卷一 帝紀第一 高祖宣帝の景初二年の記事を訳したものと思われる。

この記事からは、洛陽から遼東までの軍の移動に100日かかり、出陣から200日程で公孫氏を討伐したことになる。使いの往来は軍の移動よりも日数は少なかったはずである。6月に使いを派遣したということは、征討が終わった直後か、大勢が決した状況で、祝賀の使節を派遣したということになり、戦況を把握していたと考えられる。

次の記事は

“正始元年 240 帯方郡の太守弓遵は、建忠校尉梯携らを遣わして、詔と印綬を倭国に持っていかせ、倭王に任命した。(倭国伝)”

太守弓遵遣建中校尉梯俊等奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王

である。

景初二年 238 に叙されたものを倭国に送ったのであろう。半年で詔勅が下りたことを考えると、1年を過ぎているのは少し長い。帯方郡太守の名前は、景初二年は劉夏で正始元年は弓遵となっている。時期的に、弓遵は公孫氏により選ばれたはずである。戦後処理の一貫として太守の交代が行われたのではないか。さらに、弓遵は赴任にあたって、詔書と印綬を携えていたとすれば、遅くなるのも納得できる。

“正始四年 243 倭王は大夫の伊聲耆掖邪狗ら 8 人を使いによこした。・・・を献上した。”

倭王復遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等八人・・・上獻 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

最後の 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬 は正確には理解していない。掖邪狗に率善中郎將の爵位を与えたとしておく。

“正始六年 245 詔を発して倭の難升米に、黄色い垂れ幕を、帯方郡の太守の手を通して与えた。(倭国伝)”

詔賜倭難升米黄幢 付郡假授

黄幢は皇帝の軍旗である。おそらく、正始四年に魏に援助を要請し、これに黄幢を与える処置が為されたと考える。「錦の御旗」の効果があったのではないか。

“正始八年 247 帯方郡の太守王頎が着任した。倭の女王卑弥呼は、狗奴国の男王卑彌弓呼と以前から仲が合悪かったので、倭の載斯・烏越らを帯方郡に遣わし、お互いに攻めあっている様子をのべさせた。(倭国伝)”

太守王頎到官

倭女王卑彌呼與 狗奴國男王卑彌弓呼素不和 遣倭載斯 烏越等詣郡說相攻撃状

この記事からは、狗奴国は倭国の構成国とするのが妥当と思われる。辰韓弁辰 24 国の中に弁辰狗邪國、女王奥への行程中に狗邪韓國がある。

びんいん 狗: gǒu、邪: xié、奴: nú

邪をヤと読むのは考慮の余地がある。

帯方郡の太守は、劉夏→弓遵→王頎 と代わったことになる。

正始六年假授された黄幢は王頎の到官までは倭に渡っていなかったのではないか。そこで、新太守に改めて使者を送ったと考える。

“帯方郡では、国境守備の属官の張政らを遣わし、彼に託して詔書をと黄色い垂れ幕を持って行かゆかせて、難升米に与え、お触れを書いて卑弥呼を諭した。使者の張政らが到着した時は、卑弥呼はもう死んでいて、大規模に、直系百余歩の塚を作っていた。殉葬した男女の奴隷は、百余人であった。かわって男王を立てたが、國中それに従わず、殺し合いをして、当時数千人が死んだ。そこでまた、卑弥呼の一族で台与という十三歳の少女を立てて王とすると、国がようやく収まった。そこで張政らはお触れを出して台与を諭し、台与は倭の大夫、率善中郎將の掖邪狗ら二十人を遣わして張政らを送って行かせた。(倭国伝)”

遣塞曹掾史張政等因齋詔書 黄幢 拜假難升米爲檄告諭之 卑彌呼以死 大作塚徑百餘步 殉葬者奴婢百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等以檄告諭壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還

とある。

張政らを派遣し、詔書と黄幢を渡そうとしたが、卑弥呼は既に死んでいて、塚が造られ、葬儀も行われていた。男王を立てたが治まらず、卑弥呼の宗女の壹与が王となっていた(壹の新体字は壺)。ここで、張政は

卑弥呼の死について時期や原因を聞くか知らされたと考える。ここで、卑弥呼の死に関して、疑問を設定しておく。

疑問 7.3. 卑弥呼は何時何処でなくなったのか。

塞曹掾史は帯方郡の官職名である。詔書と黄幢を太守の代わりに届けるのだから、郡ではかなりの高位の役職と考える。

Wiki「掾」では

掾は、中国の秦漢代に中央朝廷と地方官署内に設けられた事務処理機構曹の長官である。掾はみな府主(本府の長官)自らが任命を行う。

塞は「漢字ペディア」によれば、② とりで、要害の地、城塞、要塞、とあり、恐らく、帯方郡の郡衙を指すのではないか。これより、郡衙の防衛長官ということになる。

この次の正史の記年記事は、晋書の

“文帝が相国ついたにときとその後数回行われた。”

文帝作相 263 又數至

である。

7.3. 倭女王卑弥呼

ここでは、疑問 7.3. を念頭において、卑弥呼について考える。

朝貢の記事は、景初二年 238、正始四年 243 で、これに対する魏の対応が、正始元年 240、正始六年 245、正始八年 247 の記事である。景初二年の最初の朝貢は、前節で考察したように、公孫氏討伐の状況を把握し、即座に対応したことになる。また、この記事から、倭女王に下した詔書で親魏倭王卑弥呼と記していることから、238 年の倭王は卑弥呼であったことになる。

相互遣使が定期的に行われたものとして、遣唐使と朝鮮通信使が思い浮かぶ。Wiki「遣唐使」からは、630 年から 838 年までの間に 19 回行われた。同じく Wiki「朝鮮通信使」からは、江戸時代には、1607 年から 1811 年の間に 12 回行われた。概算すれば、両者とも期間はほぼ 200 年で、遣唐使は 10 年に 1 回、朝鮮通信使は 20 年弱に 1 回である。使節団の規模は異なるが、魏の時代は 3 世紀前半であることを考慮すれば、三国志のような往来を行うには日本列島から行なうのは難しいと考える。言い換えれば、卑弥呼は朝鮮半島に居た。付随して、倭王の居住する所の邪馬壹国も 238 年には朝鮮半島にあったことになる。

卑弥呼の即位した(共立された)年については、2つの解釈を考えた。1つは桓靈間で、もう1つは後漢中である。前者では即位年の下限が189年となり、後者では即位年の下限は220年となる。

死亡時期に関しては、景初二年238の記事より、この時の倭王は卑弥呼であることより、死亡年の上限は238年である。また、正始八年247の記事では、卑弥呼は既に亡くなっていたことから、下限は247年である。正始四年243の記事では倭王となっている。これを男王によるものとするれば、下限が4年繰り上がり243年となる。これらから、次の作業仮説をおく。

作業仮説 7.2. 卑弥呼は朝鮮半島に居て、238年から243年の間に亡くなった。

即位時の年齢は書かれていない。後漢書では年長不嫁、三国志では年已長大 無夫婿 と書かれていることから、若くても30歳、感覚的には40歳から50歳辺りが妥当ではないかと考える。

桓靈間と後漢中に即位したとして、正始八年247まで生きたとして、死亡時の年齢を、即位時30歳、40歳、50歳についてみれば

	即位年の下限	30	40	50
桓靈間	189	88	98	108
後漢中	220	57	67	77

となる。これからは、桓靈間の即位の可能性は薄いと思われる。後漢の終わりごろに40歳辺りで即位したとするのが妥当なところかと考える。この年齢ならば、死亡原因として自然死も十分考えられる。

壺与については卑弥呼の宗女で13歳で即位したと書かれているだけで、考察の手掛かりはない。作業仮説 7.2. からは、即位は朝鮮半島で行われたことになる。張政らはお触れを出して壺与を諭したことから、即位後そんなに経っていないのではないかと、すなわち、壺与の即位は正始八年 247 直前ではないかと考える。

7.4. 女王国への旅程

旅程を考える前に「里」について考察する。

高句麗在遼東之東千里、韓については、方可四千里 というように距離が書かれている場合がある。

Wikipedia「里」では

里は元々は古代中国の周代における面積の単位であり、300歩四方の面積を表していた。後にこの1辺の長さが距離の単位となった。周・漢の1歩は1.3m余りであったと推定され、1里の長さは400mほどであった。古代の軍隊の行軍速度は1日に30里とされた。

と書かれている。

この1里=400mという規準からは、千里は400kmとなる。Google mapで、高句麗の都があったされる鞍山と遼東郡の郡衙があったとされている通化の間を測ると200km程度である。また、韓の方可四千里は1600kmになる。朝鮮半島に1辺1600kmの正方形は描けない。これらから、正史の里程は実測に基づくものではないことは明らかである。3世紀に測量が行われたのも疑わしい。

しかし、実速でなくても、相対的な関係は表しているのではないかと考える。Wikiの「1日に30里」ということから、移動するに要した日数を1日に30里で換算したのではないかと考えた。

なお、30里は12Kmで、京都駅からの鉄道の距離で12Kmに近いのは、東は膳所駅が11.7km、西は神足駅が10.1Kmである。

古代中国の軍隊は(重装)歩兵兵団が主力であったと考える。また、その地形は平地である。高句麗条には 其馬皆小 便登山 という記事がある。高句麗は山道で移動は平地より倍の時間がかかるとすれば、距離は半分になる。

韓の方可四千里についてはどうだろうか。Google Map を見ていると、韓があったとされる朝鮮半島南部は、遼東半島東部よりも、さらに険しい地形と見られる。1里=400mからは、1600Kmとなる。同じく、Google mapからは、若干南北に長い矩形と見られなくもない。東西方向は200Kmよりは長く300Kmよりは短く見える。中間をとって250Kmとし、これを規準としておこう。

作業仮説 7.3. 韓と倭の記事では、4000里=250Km、1000里=60Kmで換算する。

これを、4,000 里=250Km 説とよぶことにする。この換算規準では、1 里は 0.0625Km となる。まずは、個々の場合に、適用できるかをチェックも兼ねて、旅程を見ていくことにする。当面は移動に関する部分のみを訳すことにする。今後、この記事を旅程記事とよぶことにする。

旅程は次の文で始まる。

“(帯方)郡より倭に至るには、海岸にそって船で行き、韓国を南また東に経て倭国の北岸の狗邪韓国に到達する。この間七千里余りである。”

從郡至倭 循海岸水行 曆韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓国 七千餘里

出発地は当然帯方郡の郡衙である。至倭 であるから、倭国への旅程となる。帯方郡の郡衙は屯有県で、現在の黄海北道黄州で大同江下流部の都市で、沙里院市ともいわれている。まず、帯方郡の郡衙から、海岸に沿って船で韓に行く。この後、韓国内を南に行ったり東へ行ったりするという。現在の慶州や釜山のある忠清南道では殆ど東に行くことになることより、韓は京城辺りと考えている。

曆韓國 到○○は韓国を経て○○に至るで、至る先は韓国の外ととるのが自然と思われる。馬韓で挙げられた 50 余国の中に狗邪韓国は含まれていないが、辰韓・弁辰の 24 国のうちに弁辰狗邪国がある。狗邪韓国の 1 つの解釈は 狗邪韓 という国である。もう 1 つは韓狗邪国で、韓狗邪国

ならば韓の狗邪国となる。三国志では、弁辰は韓の1種であるから、弁辰狗邪国を韓狗邪国とすることはあり得る。

ぴんいん 邪: xié、奴: nú

狗邪国は三国志で正始八年の記事にある 倭女王卑彌呼與狗奴国男王卑彌弓呼素不和 に現れる狗奴国である可能性が考えられる。

ここまでは、経由した国の記載はなく、さらっと書かれている。水行と曆韓國 の日数が書かれていれば、規準となるのだが、残念ながら書かれていない。恐らく、郡の官吏にとっては朝鮮半島のことはよく知られていたため、書く必要がないと判断されたか、単に倭人条なので、韓のことは書かなかったのかが考えられる。

距離は、前に考察したように、4000 里 = 250Km 説を規準すれば、7000 里は 437.5Km となり、京釜線の 441.7Km に近い値になる。

“初めて海を渡る。千里余りで対馬国に至る。そこの大官は卑狗といい、副官は卑奴母離という。絶海の孤島といえ、400 里四方で、山は陰しく深林が多く、道路はけもの道のようなものである。千戸余りで良田はなく海産物を食べることで生活している。船に乗り南北の市で穀物を買っている。”

始度一海 千餘里至對馬國 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離 所居絕島 方可四百餘里
土地山險 多深林 道路如禽鹿徑 有千餘戶 無良田 食海物自活 乖船南北市糴

対馬国は対馬で問題ない。4,000里=250Km 説からは、千里は60Km強
である。Google Map では、釜山と対馬の間は、50Km程度に見える。

“瀚海という海を南に渡ると、一大国に至る。・・・(訳)”

又南渡一海千餘 里 名曰瀚海 至一大國 官亦曰卑狗 副曰卑奴母離 方可三百里
多竹木叢林 有三千許家 差有田地 耕田猶不足食 亦南北市糴

一大と壺岐とは漢字としては異なると思われるが、他には考えようが
ない。釜山と対馬の間と対馬と壺岐の間はほぼ同じである。

“また海を渡り、千里余りで末盧国に至る。・・・(訳)”

又渡一海 千餘里至末盧國 有四千餘戶 濱山海居 草木茂盛 行不見前人 好捕魚鮓
水無深淺 皆沈沒取之

末盧国は現在の唐津市辺りか。唐津市の西北部の半島の部分は鎮西
町、旧東松浦郡鎮西町であった。秀吉の文禄・慶長の役での名護屋城は
この西よりにある。古代から近世まで朝鮮半島への出入り口であったと
言える。また、加部島・神集島などの島もある。壺岐と唐津の間は壺岐
と対馬の間よりやや短い程度である。

“東南へ陸路 500 里で伊都国に至る。・・・世々王が治めており皆が女王国に属する。郡使が行くとき常に駐留するところである。・・・

(訳)”

東南陸行五百里 到伊都國 官曰爾支副曰泄謨觚 柄渠觚 有千餘戸 世有王 皆統屬
女王國 郡使往來常所駐

伊都国は現在の糸島市辺りとされている。地図から鎮西町の東になる。4,000 里=250Km 説からは 500 里は 30Km となる。末盧国を名護屋で、陸行するとすれば、初めは東南方向に出発することになる。名護屋からの直線距離は 20Km 程に見えるが、道は南に曲がりこんでおり、30Km に近い。郡使往來常所駐における常からは郡使の往来が複数回あったことになる。正始八年 247 直後に移ったとして魏の滅亡する 265 年までに常に駐留することが可能かは少し疑問が残る。

“東南には百里で奴国に至る。・・・(訳)”

東南至奴國百里 官曰兕馬觚 副曰卑奴母離，有二萬餘戸

この奴国は福岡市辺りとするのが通説。福岡市の中津は那の津からきたと言われている。さらに奴の津か。那と奴は同じかどうか。(奴：nú、那：nà) 4,000 里 = 250Km 説からは 100 里は 6Km となるが、糸島市と福岡市の中心部とは、これよりは長い。Google Map からは、この間はかなり平坦であることから、同じ日数でも距離は長くなることが考えられる。金印の発見された志賀島が奴国とも考えられるが、どうなのか。糸島半島の東端と志賀島の直線距離は数 Km 程度に見える。

“東に行けば、百里で不弥国に至る。・・・(訳)”

東行至不彌國百里 官曰多模 副曰卑奴母離 有千餘家

不弥国には有力な比定地はない。伊都国と奴国の間も百里とある。福岡からこの距離にある所としては宗像市が挙げられる。一方、志賀島から数 Km 程度ならば、博多湾の東端辺りとなる。福岡辺りと考えておけばいいのではないかと考える。

この次は距離が日数で書かれている。

“南に行けば投馬国に至る。船で 20 日である。・・・(訳)”

南至投馬國 水行二十日 官曰彌彌 副曰彌彌那利 可五萬餘戸

投馬國にも有力な比定地はない。ここからは旅程が里ではなく、日数で書かれている。

“南に行けば邪馬壹国に至る。女王のいる都である。船で10日、陸路を1か月である。・・・”（訳）

南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次曰彌馬升 次曰彌馬獲支 次曰奴佳鞮 可七萬餘戸

続いて

“女王国から北の国は戸数と里程を載せることは可能であるが、その他の国は遠く離れており詳しく知ることはできない。(21国の名)これが女王国の境界である。”

自女王國以北 其戸數道里可得略載 其餘旁國遠絶 不可得詳（次有斯馬國 始まり、21国の名）此女王境界所盡

さらに、

“その南には狗奴国がある。男王で、その官に狗古智卑狗があり、女王国には属さない。帯方郡より女王国には1万2000里である。”

其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王 自郡至女王國萬二千餘里
と書かれている。狗奴国は今のところ不明である。日本書紀からは、南
にある国は熊襲である。

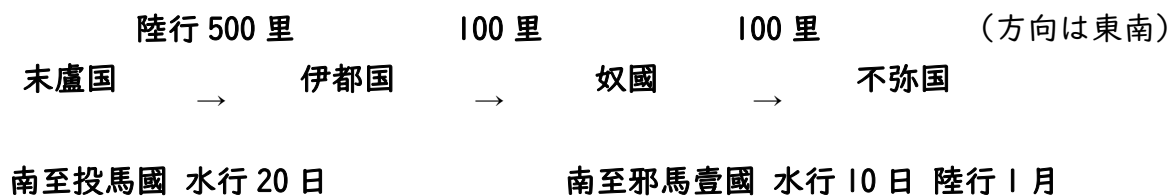


図 7.2. 各国間の距離

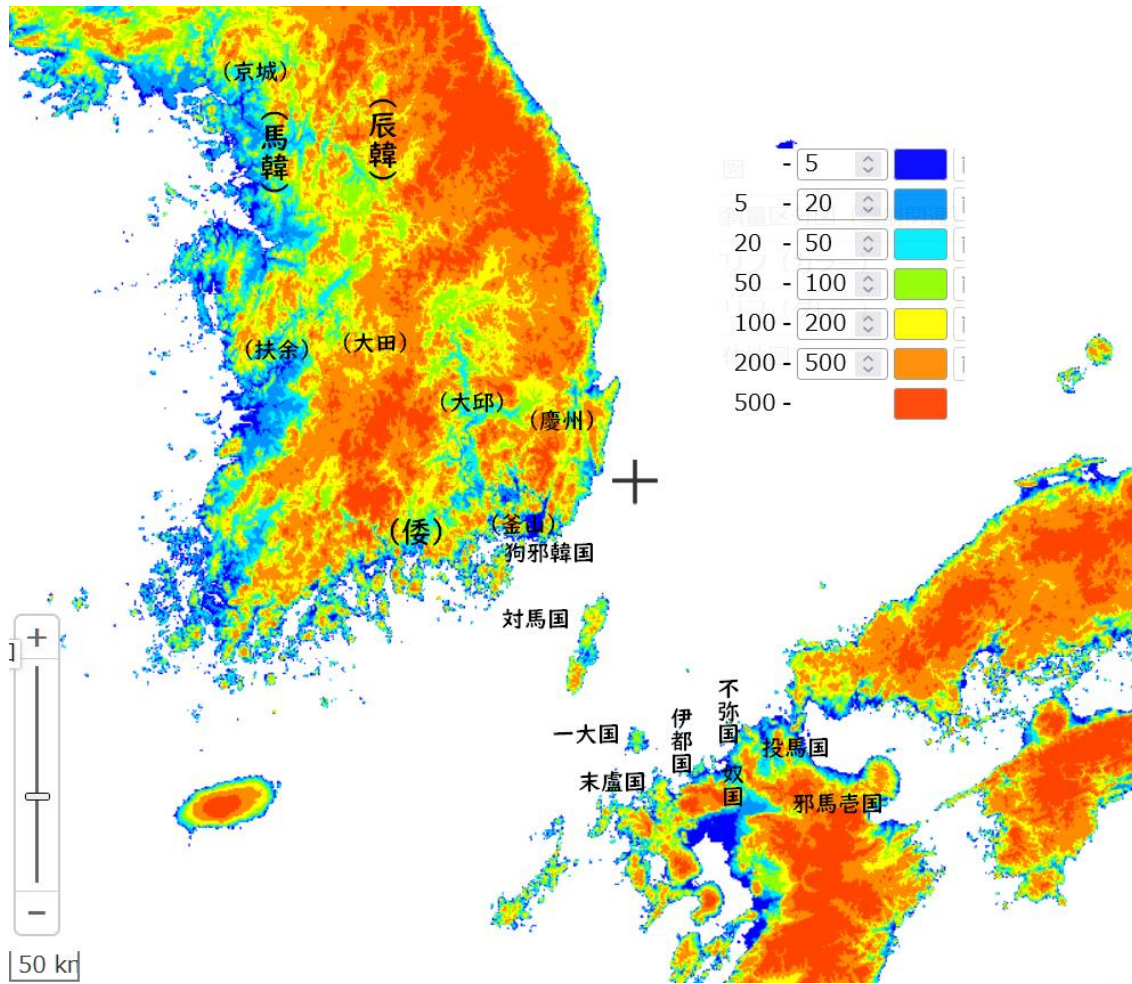


図 7.3 旅程に現れる国々

7.5. 行程考察

行程について想いつきで調べたことと地勢図を揚げていく。

始に、水行について考える。旅程の始めは、水行し、韓の中を陸行していた。水行 10 日でどの程度進むのか。魏の時代に呉との戦いから海運が発達した。これは帯方郡から韓と倭にも伝わったはずである。これも倭の移住の要因となったことも考えられる。船の航海が可能ならば、陸路より海路のほうが盗賊に関しては安全である。

古代船の復元と航行に関しては幾つかの web site で報告されている。古代船の復元に関しては、[「科学する邪馬壹國 古代の船と航海ルート」](#)が参考になるが、航行に関しては平均巡航速度が報告されているだけである。また、管理者の死去により現在では閉鎖された web site であるが「日韓古代文化研究会・野生号」という記事を見つけた。ここから、興味ある部分を抜き出す。

野生号は、1975 年 6 月 20 日に仁川を出航し、魏志倭人伝の記述通りに半島の西海岸と南海岸の多島海航海し、7 月 17 日に狗邪韓国があった付近の釜山に到着している。そして、7 月 21 日に釜山港を出発し、対

馬、壱岐を經由して8月1日に呼子に到着、その後唐津、博多を経て8月5日に志賀島で航海を終えている。実に45日間におよぶ船旅だった。

この記事からは、呼子(唐津市、唐津と名護屋の間)と志賀島の間を4日かかったことになる。Google 地図での目測では、直線距離で40Kmほどである。これを基準とすれば、海岸線に沿って航行する場合、水行十日で進める距離は100Kmほどとなるが、漕ぎ手も少なく荷物を積んだ場合は少なくなるであろう。

Wiki「邪馬台国」から、実際の旅程も三国志の記述のようであったとする説(連続説)と、不弥国までは距離が里で書かれているが、投馬国と邪馬台国は日数で書かれていることに着目して、伊都国を起点として、奴国・不弥国、投馬国、邪馬台国が放射状に書かれているとする説(放射説)がある。放射説には幾つかのヴァリエーションがあるようだ。

距離の書き方は、末盧国までは度一海千余里。末盧国から伊都国は東南陸行五百里と書かれているが、その先の不弥国までは東南至〇〇国百里と書かれている。さらに、この後は日数で水行二十日と水行十日陸行一月と書かれている。

これと郡使往來常所駐と合わせれば、伊都国から先は聞いた話と考えられる。

野生号の記事から、水行十日は 100Kmh ほどと推測した。これから、水行二十日は 200Km ほどとなる。陸行については、「里」でみた、1日 30里を基にする。作業仮説 7.3 では短すぎるので、1里 = 12Km では陸行一月は 360Km となる。遼東郡と高句麗の間はこの半分であった。地勢を考慮すれば、さらに半分の 100Km 程度となるが道が曲がりくねっていることを考慮すれば、さらにその半分程度の 50Km も考えられる。

不弥国と伊都国から、それぞれ、直列的に行く場合と並列的に行く場合を考えてみる。

不弥国 = 宗像市とする。九州の東海岸を沿って 50Km の地点は北九州の東部辺りが近い。さらに、九州で海岸線に沿って、50Km 地点を考えれば、宇佐から国東半島の付け根辺りとなる。同様に、宇佐から 100Km は臼杵辺り、さらに 100Km は延岡か日向辺りとなる。中国をとれば、100Km は宇部辺りとなる。荷物を積んでいることを考慮すれば、もう少し短くなる。

伊都国＝系島市とし、海岸線を 100Km 地点は伊万里か佐世保。佐世保から 100Km は天草周辺で、この後陸行することを考えれば、宇土半島が浮かんでくる。系島市から熊本県の海岸に行くならば、陸路で南下するほうが可能性が高いのではないかと考えられる。

旅程には官名と戸数が書かれている。これらを表にしておく。

表 7.1 女王国の官名

国		官	副官	
對馬國	千余戸	卑狗	卑奴母離	(官は大官)
一大國	三千許家	卑狗	卑奴母離	
末盧國	四千余戸			
伊都國	千余戸	爾支	泄謨觚・柄渠觚	
奴國	二万余戸	兕馬觚	卑奴母離	
不彌國	千余家	多模	卑奴母離	
投馬國	五万余戸	彌彌	彌彌那利	
邪馬壹國	七万余戸	伊支馬	彌馬升	彌馬獲支 奴佳鞮

現在、この表からは何も得られていない。伊都国が 郡使往來常所駐とあるのに、戸数が少ないのは若干奇異に感じる。

投馬国と邪馬壹国との間に、水行から陸行に移る所も倭国の拠点と考えられる。

旅程の記事から、各国間の距離と各国の戸数をみる。

	末盧国	四千余戸	
東南陸行五百里	伊都国	二万余戸	郡使往來常所駐
東南百里	奴国	二万余戸	
東行百里	不弥国	千余家	
南水行二十日	投馬国	五万余戸	
南水行十日陸行一月	邪馬壱国	可七万余戸	

後漢書では、楽浪郡は、18 城(県)、61,492 戸、257,050 人である。晋書では、楽浪郡は、6 県、3,700 戸である。また、帯方郡は、7 県、4,900 戸である。なお、三国志には志がない。

戸数としては、旅程の国々は多い気がする。国の大きさを表しているという程度に用いることにする。

行程表の国々のうち、末盧国・伊都国・奴国・不弥国図の 4 カ国の位置はほぼ同じである。これらを 7.4 書き込んでみた。奴国は志賀島に近い筥崎宮辺りとした。ここで、伊都国と奴国の間と奴国と不弥国の間はほぼ同じ長さとなっている。

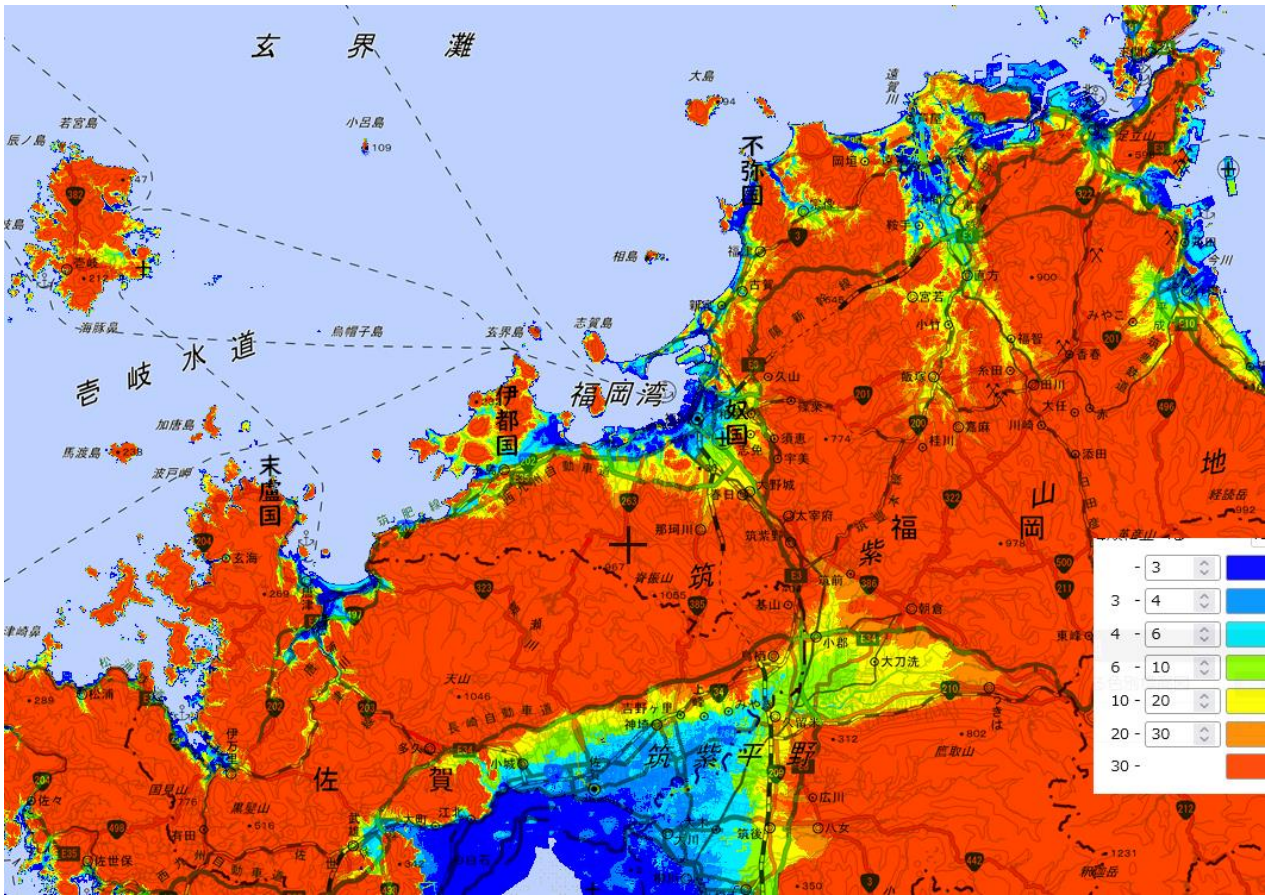


図 7.4. 九州北部

末盧国は‘唐津市辺りか’とした。現在では、東松浦半島の唐かなりが津市になっている。これは、末盧国と伊都国の間はほかより5倍となっていることに合わない。

地理的状況を把握するため、もう少し大きな(低縮尺の)地勢図を作成した。これが図 7.5 である。ここで、黄色の部分が高抜 10m から 20m であるので、居住できるのはこれより高い所となる。青の部分 h 湖水地帯で、気取りの部分は湖沼地帯と考えている。

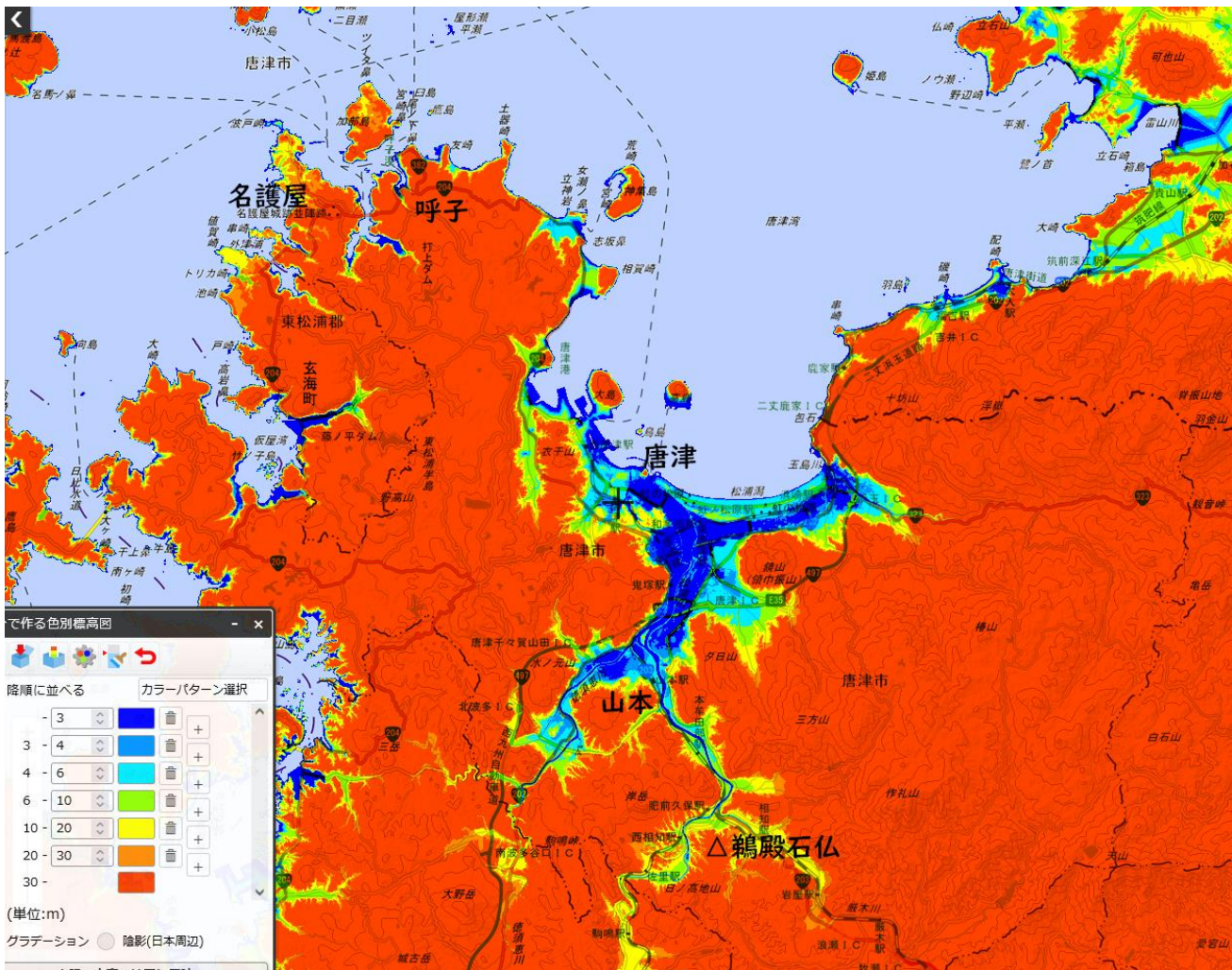


図 7.5. 松浦半島

地図を見ていると、2つの打開案を思いついた。

1つは陸行の経路である。図 7.4 でも見られるが、図 7.5 ではっきりわかることは、青い部分がかなり奥まで食い込んでいることである。陸行するとすればこれを迂回することが必要と思われる。この経路を大雑把にみれば、末盧国と伊都国の間は伊都国と奴国の間 3 倍から 4 倍程に見える。

もう1つは、別の場所を探すことである。具体的には、松浦半島の北辺

にある、加部島と呼子か名護屋城跡辺りである。名護屋城は秀吉の朝鮮役の発信基地となったところで、幾つかの武将の陣屋跡が残っている。

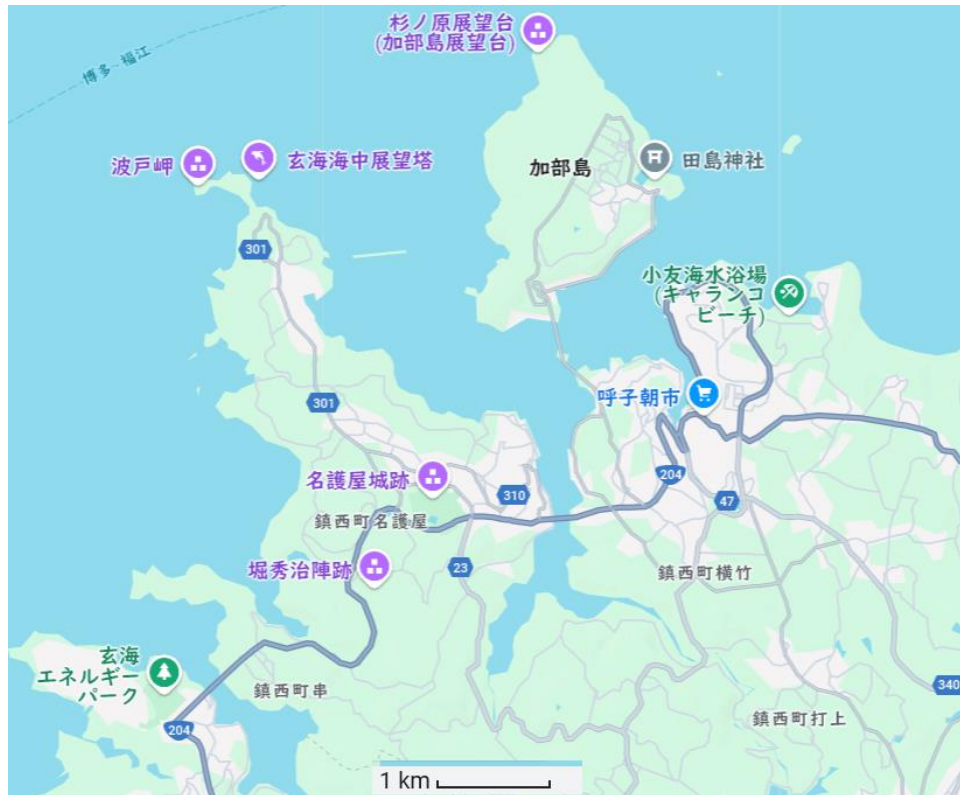


図 7.6. 呼子・名護屋

陣屋跡が残っているということは、廃棄後大きな建物は建たなかったことをしめしていると思われる。ということで、呼子を候補としておく。

呼子よりも経路の追考のほうが妥当と思っている。

伊都国は、定説に従い、糸島(とその対岸)としている。現在は糸島市と福岡市に分かれている。九州大学のキャンパス造成に伴い、全面的に発掘

された元岡・桑原遺跡群のある元岡辺りが現在の第1候補である。元岡は最北端の岬の真下になる。

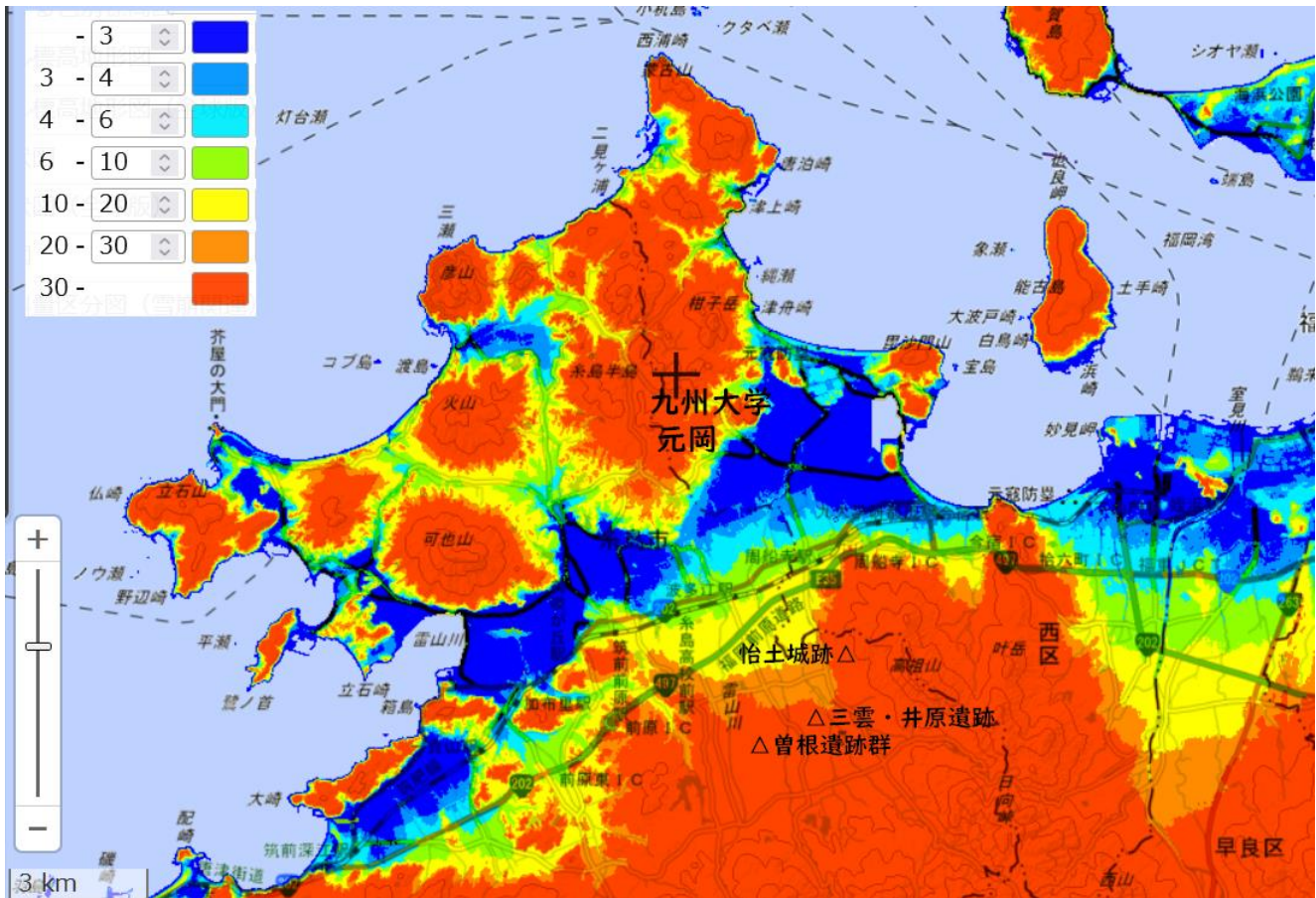


図 7.7. 系島

前稿‘正史を彷徨う’の東遷に関して見たように、倭の東征軍の 新吉といえる宮は征服地に近い島(または、半島)に造られている。これは、圧倒的な水軍により成り立つ戦略であろう。加えるに、造船技術も挙げられるかもしれない。

元岡・桑原遺跡群については、

「九州の大製鉄コンビナート 福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて」

<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/7iron12.pdf>

で、元岡製鉄遺跡群の概要が書かれている。

全国遺跡報告総覧 <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

で、書名「元岡・桑原遺跡群」シリーズ「福岡市埋蔵文化財調査報告書」で検索すれば、同報告書1-24がダウン・ロードできるが、これらは素人が簡単に読めるものではない。

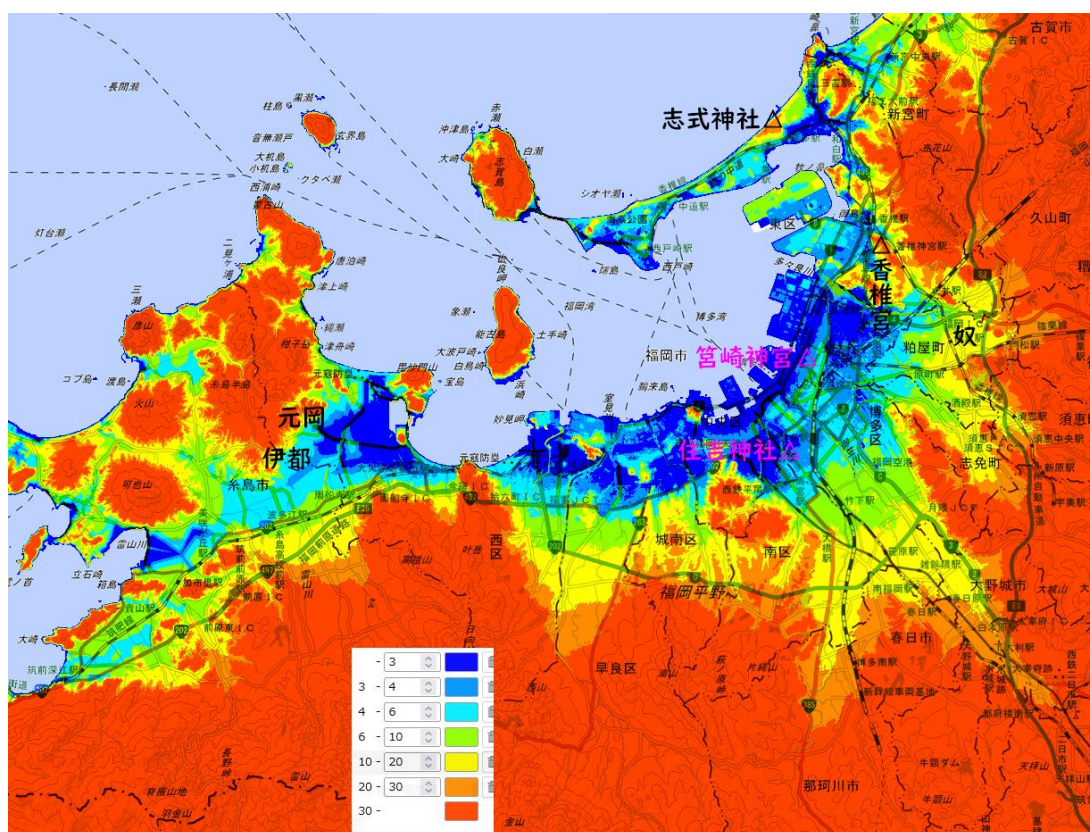


図 7.9. 福岡

奴国は福岡市中心部辺りとした。金印で有名な志賀島は、旅程の戸数とからは、少し小さい気がし、筥崎宮辺りが候補かと漠然と考えていた。しかし、図 7.9 からは、筥崎宮や博多駅近くの住吉神社は青色部分である。海に近い黄色いところを探すと香椎宮が見つかった。志賀島に近く有力な候補と考えている。

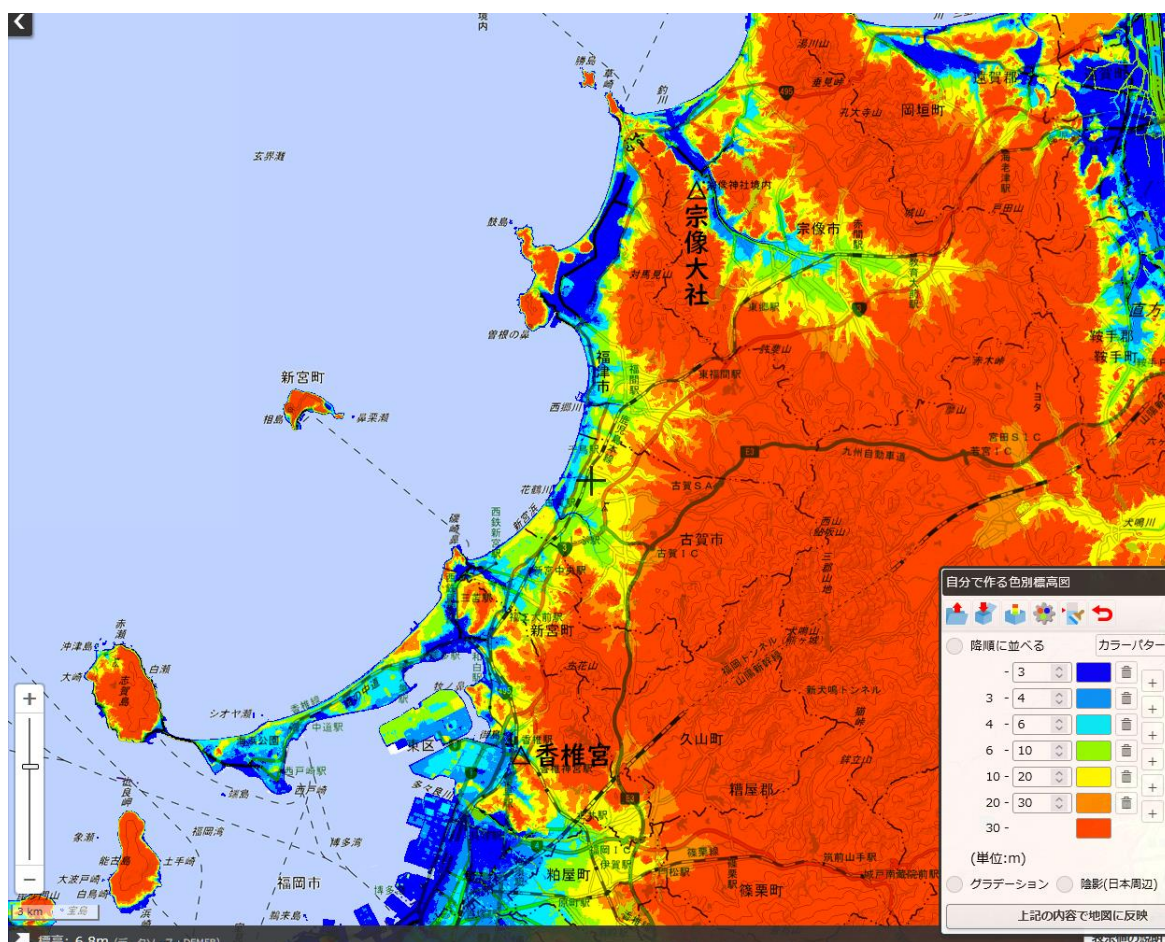


図 7.9. 志賀・宗像

不弥国は旅程の距離から、宗像神社のある宗像市辺りと考えた。

ここまでは、諸説でもほぼ同じと考えている。

投馬国以降については、その位置も含めて定説はなくい。

前章の野生号の記事で、呼子と志賀島の間を4日かかったことを見た。この場合は乗船者＝漕ぎ手 のようであった。実際に荷物と乗客があった場合にはどうなるかの実験があれば面白い。比較に絞れば、同じ船を2隻準備し、漕ぎ手だけと、人と荷物を載せたもので、静水と川を想定した緩やかな流水で行うのが一番望ましいが、1隻で状況を変えて行うだけでも貴重である。帆走の考慮も必要となる。

当時帆走はどのような状況であったか、また、島の間を縫っていく場合、帆走が可能かなどの問題が考えられる。京杭大運河でどんな船がどのように用いられていたのかちょっと探ただけでは見つかっていない。

図7.4で遠賀川河口周辺(北九州市)は、現状の認識とかなり異なることを見た。特に、筑紫湖と名付けた湖水の存在は水行の考察に関わると考える。この図の北九州市周辺を少し大きく(低縮尺)したのが次図である。

若松地区が殆ど島であったということがはっきりしてきた。この図からは、洞海湾から筑紫湖(遠賀川)に水行と思われる。このようは地形としては、糸島・児島・島根半島が挙げられ、千葉県(安房・上総・下総)も加えられるかもしれない。

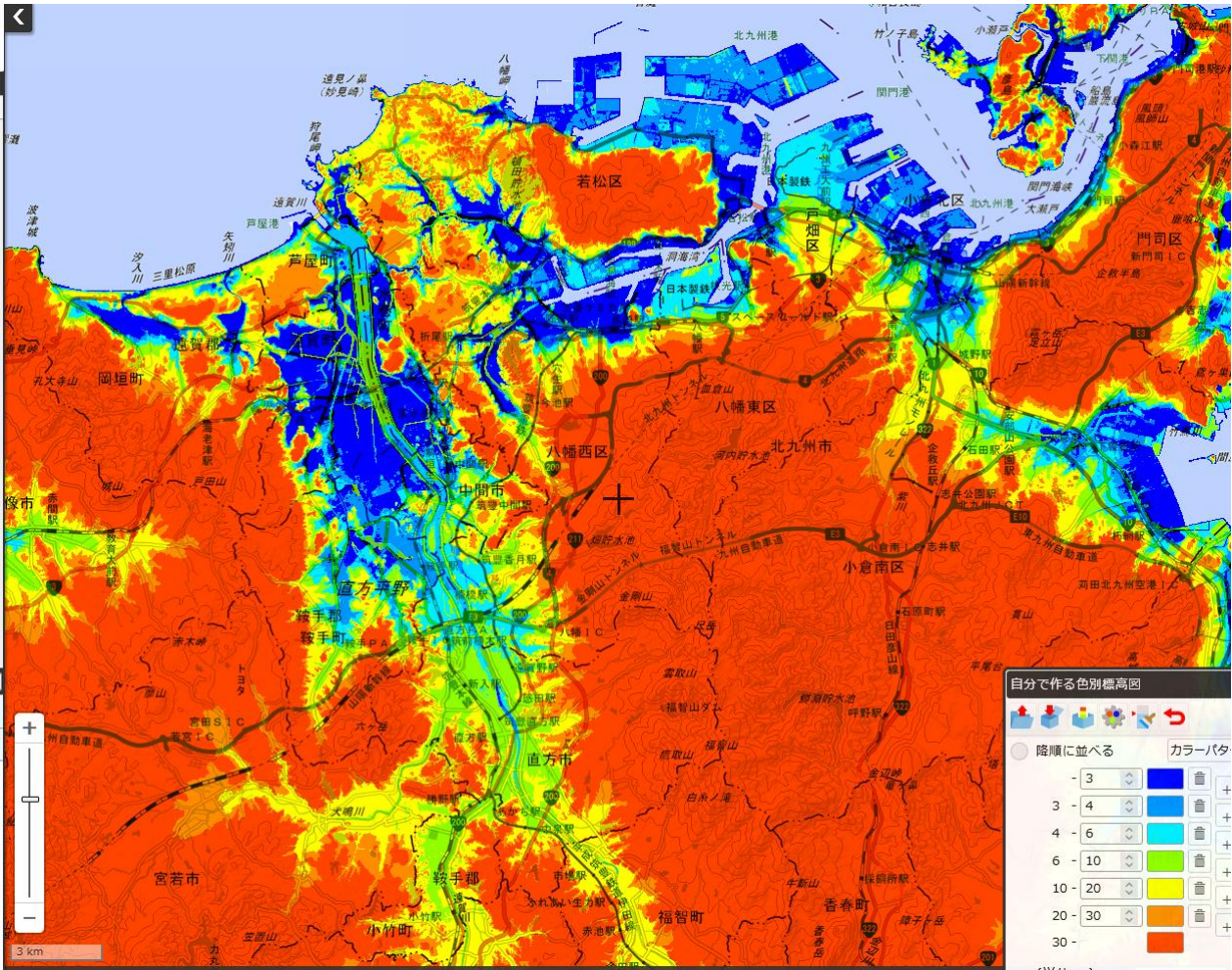


図 7.10. 筑紫湖

若松島の下の方の半島部の付け根辺りに中馬市がある。漢字的には、
 投馬: tóu mǎ、中間: zhōng/zhòng jiān/jiàn である。

日豊本線の方も、小倉からは城野駅辺りまで、朽網からは安部山公園駅
 辺りまでが、航行できたかもしれない。さらに、現在の川筋を見ていると、
 残った区間も大半が航行可能であったかもしれない。門司区も島であった
 ことになる。

若松島と中馬市辺りから小倉辺りまでは、船が着くところで、伊都国や奴国の2.5倍の五万戸の国としては最適の候補と考えている。水行二十日でどの程度の距離になるかわわからないが、筑紫湖の何処かにあったとしておく。

ここで、水行十日陸行一月で行ける所を考える。不弥国と投馬国の間は水行二十日であったから、その半分である。筑紫湖から遠賀川を遡上するのが丁度これに合うのではないか。直方市辺りが有力と考えているがもう少し南の飯塚市・田川市辺りかもしれない。ここから、陸行一月はうきは市・日田市辺りになるのではないかと考えている。これならば、女王国以北に21カ国あり得る。

7.5. 自女王國以北

風俗・国勢の終わりのほうに次の記事がある。

“女王国より北に特に大率を一人おき、諸国を檢察する。諸国は恐れ憚っている。大率は常に伊都国で収めている。まるで中国の刺史のようである。”

自女王國以北 特置一大率 檢察 諸國 諸國畏憚之 常治伊都國 於國中有如刺史

一大率は一人の大率と解釈した。大率は(時代が下がるが)百済で佐平に次ぐ官位の達率と同じ由来など何か関係があるのではないかと考えている。後漢書の大夫人も同様であると思っている。ピンイン変換では、

ピンイン 大夫：dà fū、大率：dà lǜ、達率：dá lǜ

常治の治は馬韓のところの「治月支国」と同じ用法か。旅程記事からは、伊都国には王と長官・副官がいた。この文から大率はその上の存在である。大率が王を兼ねた可能性は低く、伊都国の国衙の他に大率府みたいなものを造ったのではないかと考える。徳川時代の二条城と大阪城を兼ねたようなものを想っている。

この記事と旅程の記事の間に書かれていた

自女王國以北 其戸數道里可得略載 其餘旁國遠絕 不可得詳 (21 国の名) 此女王境界所盡 其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王

を合わせて考えてみることにする。

其餘旁國遠絶 不可得詳の部分理解でないが、“女王国の北に(全てかどうかはわからないが)21カ国があり、伊都国に常治する大率が檢察している。女王国の南には狗奴国があり、女王には属していない。”ということと、21カ国の名前が書かれている。

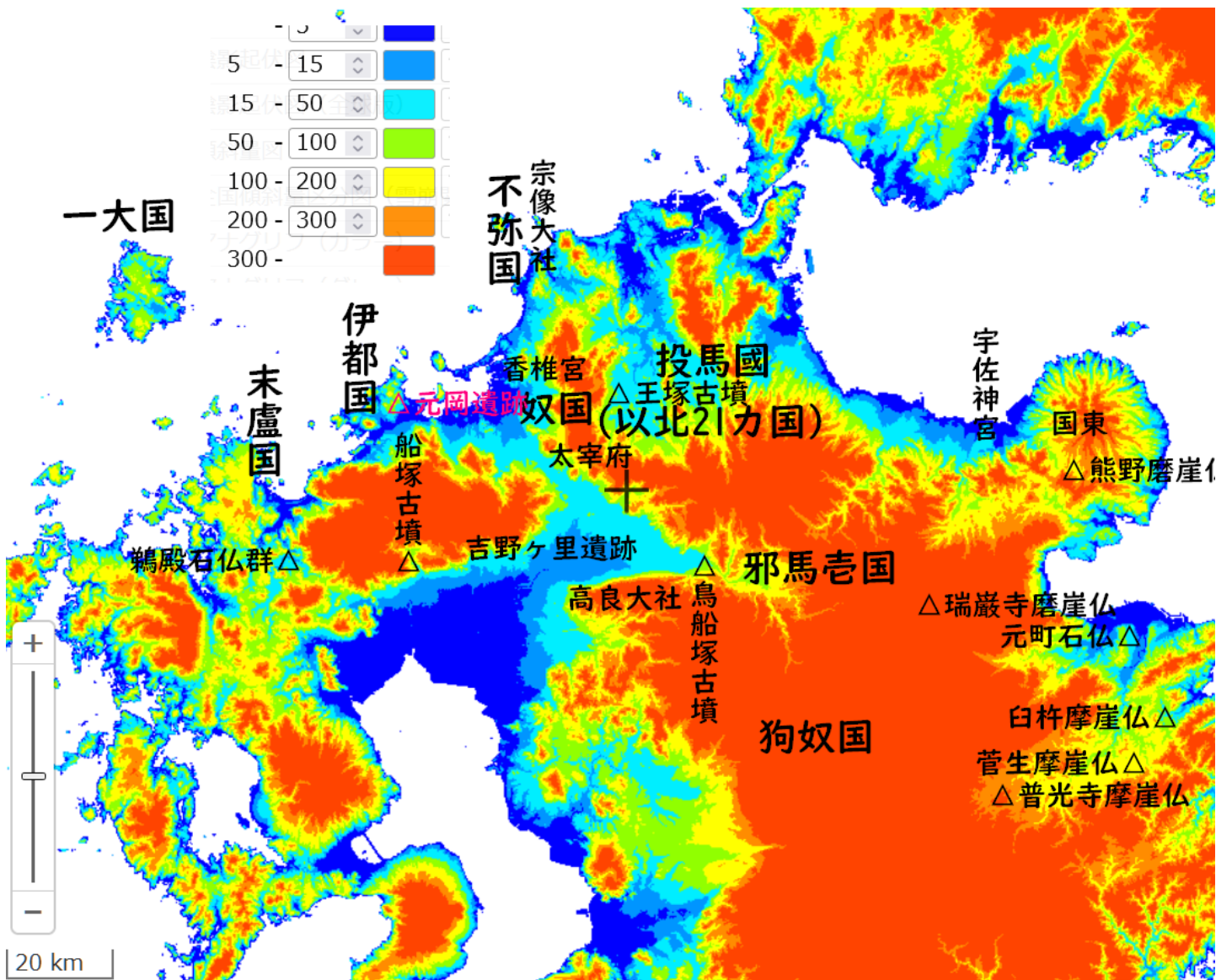


図 7.11. 女王國以北の国々

図 7.11 これまでに挙げられた国を書き込んでみた。行程のときの地勢図とは区切り値を上方に変更した。ここでは 15m 以上の緑色から上を居住可能地帯とみている。また幾つかの装飾古墳と摩崖仏も書き込んでみた。あと鉱業関係の遺跡。特に製鉄遺跡、も入れたかったが、倭鉄の道もいまだに整理できていない。

21 カ国の名前は次である。

斯馬國	已百支國	伊邪國	都支國	彌奴國	
好古都國	不呼國	姐奴國	對蘇國	蘇奴國	
呼邑國	華奴蘇奴國	鬼國	爲吾國	鬼奴國	
邪馬國	躬臣國	巴厘國	支惟國	烏奴國	奴國

最後の奴国は行程に現れる奴国と同じかどうかは書かれていない。同じ名前の国が倭の支配下に入っているよりは、同じ国とするのがより自然であろう。本稿の付録で述べる作業仮説候補 5.1 からは、これらの国の王には、倭奴国の子孫や、亡命高句麗氏族もいたのかもしれない。

図 7.11 を見ていると、福岡辺りから日田に行くのに筑豊経由で何故行くのかという疑問が浮かぶ。現在では鉄道でも高速でも久留米経由で筑後川を遡っていくのが通常である。

これに関しては、筑後川下流(さらには、有明海沿岸)は未統治であったのではないかと考えているが、次節で扱うことにする。

7.7 倭の移住

まずは、5章と本章で倭の移住に関して簡単に纏めてみる。

後漢の時代には倭は朝鮮半島にいた。正始八年 247 に帯方郡の太守王頎が着任し、張政らを遣わしととき、卑彌呼がすでに死んでいて総覧の後、卑彌呼の宗女壹與を王としたことがわかった。この後は、晋書の“文帝が相国ついたにとき 263 とその後も数回行われた。”という記事がある。247 年から 263 年の間の 16 年間に倭(壹與)の移住と行程表のもととなった使いの派遣(偵察)が行われたと考えている。

さらに、このときの使者は正始八年の記事に現れる塞曹掾史張政ではなかったかと思っている。また、張政は張騫?-BC135}の子孫で、旅程の記事は張政が書いたのではないかということをついと思った。これは本稿には影響がなく、「そうであったなら面白い」という程度である。

Wikipedia「張騫」から抜き出す。

張騫?-BC114 は中国前漢代の政治家、外交官。字は子文。漢中郡の出身。武帝の命により匈奴に対する同盟を説くために大月氏へと赴き、漢に西域の情報をもたらした。当時の漢では大月氏に対して、対匈奴の同盟を説く使者を募集しており張騫はこれに自薦して見事に選ばれた。同盟こそならなかったものの張騫が持ち帰った

西域の知識は極めて貴重なものであり、それまで漢にとって全くと言って良いほど状況が解らなかつた西域が、これ以降は漢の対匈奴戦略の視野に入ってくることになる。この功績により太中大夫とされる。紀元前 121 年の遠征の際に期日に遅れた罪で死罪となる所を金銭で贖って庶民に落とされる。

張騫の孫の張猛は匈奴の呼韓邪单于と盟を結び、また一時期元帝 BC48-BC33 に信任された。

また、Wikipedia「月氏」では

張騫が大月氏国にたどり着いた、時の大月氏王はかつて匈奴に殺された先代王の夫人で、女王であった。大月氏女王は張騫の要件を聞いたが、すでに復讐の心は無く、国家は安泰しており、漢が遠い国であるため、同盟を組むことはなかつた。と書かれている。

張騫の死後 350 年、その孫の張猛から 280 年程の差がある。死罪を免れるほどの蓄財ができたのは、経験を生かして、西方貿易にかかわっていたと考えられる。子孫もこれを引き継ぎ、張騫のように官吏になったものもいたことも考えられる。張政が張騫の子孫の可能性が全く無いとは言いきれない。

先祖の業績に倣い、呉の東に居るとされる倭の勢力を調べたというのは面白い話であり、たどり着いた先は女王が支配しており、ともに同

盟を結び匈奴・呉を攻めるという目標は達成できなかったという結果も同じである。

次の作業仮説候補を設定しておく。

作業仮説候補 7.1. 旅程表は魏使として派遣された、張騫の子孫塞曹掾史張政の報告に基づくものである。

ここで、倭の移住征討について考えてみる。

まずは、移住の手段としての船が必要である。今までのことから、朝鮮との輸送や大掛かりは遠征に必要な大型の船が複数隻と島と本土を結ぶ相当数の小型船をもっていたはずである。恐らく、他を圧倒する水軍力であったと思っている。

この圧倒的な水軍による戦略は、まず、陸上からの攻略が困難な島か半島部に船団で部隊を送り込む。次に海岸線に沿って支配地を拡げていく。この間に、増援部隊や近隣から傘下に入るものを吸収することにより、陸上からも攻められないようになっていく。このとき、魏から下賜された詔書と黄幢が役に立ったことは十分考えられる。この有効性は1300年程あとの信長の石山本願寺攻めでもわかる。毛利水軍に対抗する水軍を作り挙げるまで、攻略できなかった。

移住後、末盧国から不弥国を先ず制圧して、帯方郡の高官を留めることができるまでに統治した。さらに、筑紫湖から遠賀画沿いに浸出していった。この筑紫湖の沿岸に投馬国があったと考えている。名前からは下流の中間市辺りも考えられるが、水行二十日ということ戸数が五万余戸ということからは、遠賀川上流の直方市・飯塚市・田川市辺りが有力と考えている。投馬国から水行十日陸行一月ということからは日田市・うきは市辺りが邪馬壹国の候補となる。図 7.12 で、飯塚市・田川市は上辺左側に位置していて、筑豊炭田の南部にあたる。また、右辺上部を流れている川が山国川で、この少し右に宇佐神宮がある。

図 7.12 で遠賀川上流域の緑黄緑黄色の部分に以北 21 カ国の多くがあると思っている。21 カ国の範囲は奴国を含むことから西は福岡市街から東は豊前の山国川以北まで及んでいたかもしれない。

伊都国に置かれた大率が檢察するには旅程の経路では不十分と思われる。伊都国と遠賀川上流を直線的に結ぶ経路としては、国道 201 号線や JR 篠栗線が考えられる。魏使の時にもすでに開通していたかもしれないが、安全性の観点から採用されなかったことも考えられる。ただし、物資の輸送には船による方が有効といえる。

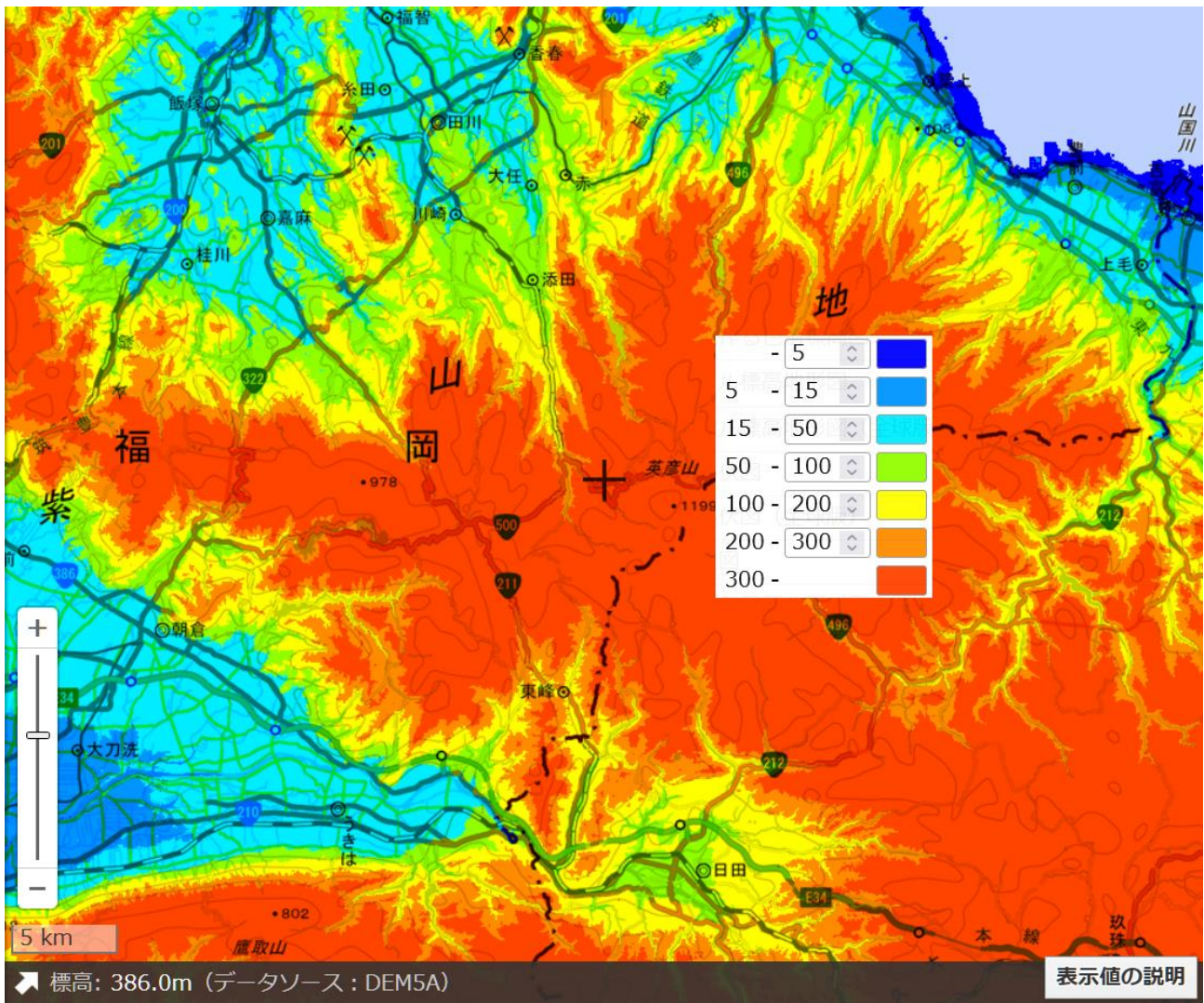


図 7.12 耶馬日田英彦

2024年での推計人口は、日田市 58,833 人、うきは市 26,441 人、朝倉市 48,137 人、飯塚市 122,964 人、田川市 44,261 人である。これからは、旅程表の戸数は誇張されていると思われる。

系島(市)あるいは伊都は古代史に興味がない人には知られていなかったと思う。最近九州大学 伊都キャンパスが造られ、九州大学の大部分が

移り、状況が変わってきたかもしれない。キャンパス造成に伴い、元岡遺跡が発掘された。

糸島について少し調べてみた。

Wiki「糸島半島」では

糸島半島は福岡県北西部、玄界灘に突出した半島である。福岡市西区今宿と糸島市加布里を境界にして、突出した部分を指す。瑞梅寺川や雷山川の堆積物によって、北部の島嶼部分と南部の雷山山塊がつながったものである。元岡遺跡群(弥生中期以降)からは製鉄炉が密集する大規模な製鉄遺構や、大宝元年701の年号が書かれた木簡、珍しいヒョウタン形土器などが出土している。

加羅の地と推定されている所には伽耶山がある。実際には、伽耶山の近くに加羅があったと推測している。伊都国の跡と言われている糸島市には可也山がある。この糸島はもともとは水路により分離された島であったという。

京城、夫余、慶州なども山城の建築が可能な山に接していて、宮殿は下の平地に建造されている。日本でも、飛鳥には高取山(城)、藤原京には耳成山があるように、邪馬台国が関係するところは単独峰が見られ

る。これは防御のための山城を造るためか。あるいは、単独峰が近くないと落ち着かないのか。

興味をもっている web site の1つに「[和鉄の道・Iron Road](#)」ある。このサイトは古代を含む製鉄遺跡を踏査し、関連する資料の収集と考察、さらに、シンポジウムの聴講記録からなる。現時点では一部の流し読み程度であるが、福岡 元岡製鉄遺跡群や菊池川・大野川の製鉄遺跡等が取り挙げられている。この菊池川流域とその北の八女・久留米には装飾古墳が数多く存在する。

いずれ、ここで取り上げられている遺跡や内容を検討し、取り入れたいと思っている。

ここで次の作業仮説をおく。

作業仮説 7.4. 三国魏の終わり頃(3世紀後半)には、女王国の都(すなわち、邪馬台国) 菊池川・大野川辺りにあった。その後、豊の国が九州の最後の拠点となった。

おわりに

Flad Maps を ‘自分で作る色別標高図’ に置き換えた。これにより、前者では漠然と感じていたことが、ある程度見られるようになった。自分で作る色別標高図については 2 種類のものを作成した。1 つは、自分で作る色別標高図に地名等を自分で書き込んだもので、もう 1 つは標準標準地図に自分で作る色別標高図を重ねたものである。前者にしたいが作成に手間が掛かることが主な原因である。これに画像処理ソフトの利用が未熟であることと目に負担がかかることも挙げられる。

日田市について調べていると、江戸時代に西国郡代が置かれたということである。

Wikipedia 「西国筋郡代」

九州の江戸幕府直轄領の民治を司る行政官たる代官であり、16 万 2 千石を所轄する。代官所は豊後国日田置かれた。西国筋郡代が所轄する天領は全国の天領のうち 2 位という大きさである。また接することの多い島津氏、細川氏、鍋島氏、黒田氏という外様雄藩との関係から通常の代官より格上の郡代とされた。その任務は長崎奉行と協力して九州諸藩の動静監視であり九州探題とも呼ばれた。

長崎奉行と西国筋郡代の職務ははっきり書かれていないが、西国筋郡代

は九州内の諸藩の、特に島津藩の、監視が任務であったと思われる。これは、九州を(征討)支配するためには好立地であったことを示しているともいえる。

付録Ⅰ 三國志の韓条と倭人条

韓条

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也 馬韓在西 其民土著 種植 知蠶桑 作綿布 各有長帥 大者自名爲臣智 其次爲邑借 散在山海間 無城郭 有爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣漬沽國 伯濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國 卑離國 占離卑國 臣曇國 支侵國 狗盧國 卑彌國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧國 內卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 白斯烏旦國 一離國 不彌國 支半國 狗素國 捷盧國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一難國 狗奚國 不雲國 不斯漬邪國 爰池國 乾馬國 楚離國 凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪馱支漬臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長 侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 魏略曰：昔箕子之後朝鮮侯 見周衰 燕自尊爲王 欲東略地 朝鮮侯亦自稱爲王 欲興兵逆擊燕以尊周室 其大夫禮諫之 乃止 使禮西說燕 燕止之 不攻 後子孫稍驕虐 燕乃遣將秦開攻其西方 取地二 千餘里 至滿番汗爲界 朝鮮遂弱 及秦並天下 使蒙恬築長城 到遼東 時朝鮮王否立 畏秦襲之 略服屬秦 不肯朝會 否死 其子准立 二十餘年而陳 項 起 天下亂 燕 齊 趙民愁苦 稍稍

亡往准 准乃置之於西方 及漢以盧綰爲燕王 朝鮮與燕界於涓水 及綰反 入匈奴 燕人衛滿亡命 爲胡服 東度涓水 詣 准降 說准求居西界 (故) 中國亡命爲朝鮮籓屏 准信寵之 拜爲博士 賜以圭 封之百里 令守西邊 滿誘亡黨 衆稍多 乃詐遣人告准 言漢兵十道至 求入 宿衛 遂還攻准 准與滿戰 不敵也 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 (魏略曰：其子及親留在國者 因冒姓韓氏 准王海中 不與朝鮮相往來) 其後絕滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁 魏略曰：初 右渠未破時 朝鮮相曆谿卿以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戶 亦與朝鮮貢蕃不相往來 至王莽地皇時 廉斯鏹爲辰韓右渠帥 聞樂浪土 地美 人民饒樂 亡欲來降 出其邑落 見田中驅雀男子一人 其語非韓人 問之 男子曰：「我等漢人 名戶來 我等輩千五百人 伐材木 爲韓所擊得 皆斷發爲 奴 積三年矣 」鏹曰：「我當降漢樂浪 汝欲去不？」戶來曰：「可 」 (辰) 鏹因將戶來 (來) 出詣含資縣 縣言郡 郡即以鏹爲譯 從芴中乘大船入辰韓 逆 取戶來 降伴輩尚得千人 其五百人已死 鏹時曉謂辰韓：「汝還五百人 若不者 樂浪當遣萬兵乘船來擊汝 」辰韓曰：「五百人已死 我當出贖直耳 」乃出辰 韓萬五千人 弁韓布萬五千匹 鏹收取直還 郡表鏹功義 賜冠幘 田宅 子孫數世 至安帝延光四年時 故受復除

桓 靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國 建安中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模 張敞等收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍 出 是後倭韓遂屬帶方 景初中 明帝密遣帶方太守劉昕 樂浪太守鮮于嗣越海定二郡 諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戶詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事吳林

以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營
時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

其俗少綱紀 國邑雖有主帥 邑落雜居 不能善相制禦 無跪拜之禮 居處作草屋土室 形
如塚 其戶在上 舉家共在中 無長幼男女之別 其葬有槨無 棺 不知乘牛馬 牛馬盡於
送死 以瓔珠爲財寶 或以綴衣爲飾 或以縣頸垂耳 不以金銀錦繡爲珍 其人性強勇 魁
頭露紒 如灵兵 衣布袍 足履革躡蹋 其國 中有所爲及官家使築城郭 諸年少勇健者
皆鑿脊皮 以大繩貫之 又以丈許木錘之 通日嚙呼作力 不以爲痛 既以勸作 且以爲健
常以五月下種訖 祭鬼神 群聚歌舞 飲酒晝夜無休 其舞 數十人俱起相隨 踏地低昂
手足相應 節奏有似鐸舞 十月農功畢 亦復如之 信鬼神 國邑各立一人主祭天神 名之
天君 又 諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之
好作賊 其立蘇塗之義 有似浮屠 而所行善惡有異 其北方近郡諸國差曉禮 俗 其遠處
直如囚徒奴婢相聚 無他珍寶 禽獸草木略與中國同 出大栗 大如梨 又出細尾雞 其尾
皆長五尺餘 其男子時時有文身 又有州胡在馬韓之西海中 大 島上 其人差短小 言語
不與韓同 皆髡頭如鮮卑 但衣韋 好養牛及豬 其衣有上無下 略如裸勢 乘船往來 市
買韓中

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之 有
城柵 其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒 有似秦
人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘；東方人名我爲阿 謂樂浪人本其殘餘人 今
有名之爲秦韓者 始有六國 稍分爲十二國

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚
次有邑借 有已祗國 不斯國 弁辰彌離彌凍國 弁辰接塗國 勤耆國 難彌離彌凍國 弁
辰古資彌凍國 弁辰古淳是國 冉奚國 弁辰半路國 弁樂奴國 軍彌國〈弁軍彌國〉 弁
辰彌烏邪馬國 如湛國 弁辰甘路國 戶路國 州鮮國（馬延國） 弁辰狗邪國 弁辰走漕
馬國 弁辰安邪國〈馬延國〉 弁辰瀆盧國 斯盧國 優由國 弁辰韓合二十四國 大國
四五千家 小國六七百家 總四五萬戶 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相
繼 辰王不得自立爲王 〈魏略曰：明其爲流移之人 故爲馬韓所制〉 土地肥美 宜種
五穀及稻 曉蠶桑 作縑布 乘駕牛馬 嫁娶禮俗 男女有別 以大鳥羽送死 其意欲使死
者飛揚 魏略曰：其國作屋 橫累木爲之 有似牢獄也 國出鐵 韓 濊 倭皆從取之 諸市
買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡 俗喜歌舞飲酒 有瑟 其形似築 彈之亦有音曲
兒生 便以石厭其頭 欲其褊 今辰韓人皆褊頭 男女近倭 亦文身 便步戰 兵仗與馬韓
同 其俗 行者相逢 皆住讓路
弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶皆
在戶西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大 衣服絜清 長髮 亦作廣幅細布
法俗特嚴峻

倭人条

倭人在帶方東南大海之中 依山島爲國邑 舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國
從郡至倭 循海岸水行 曆韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里 始度一海 千
餘里至對馬國 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離 所居絕島 方可四百餘里 土地山險 多深
林 道路如禽鹿徑 有千餘戶 無良田 食海物自活 乖船南北市糴 又南渡一海千餘 里
名曰瀚海 至一大國 官亦曰卑狗 副曰卑奴母離 方可三百里 多竹木叢林 有三千許家
差有田地 耕田猶不足食 亦南北市糴 又渡一海 千餘里至末盧 國 有四千餘戶 濱山
海居 草木茂盛 行不見前人 好捕魚鮪 水無深淺 皆沈沒取之 東南陸行五百里 到伊
都國 官曰爾支 副曰泄謨觚 柄渠觚 有千餘 戶 世有王 皆統屬女王國 郡使往來常所
駐 東南至奴國百里 官曰兕馬觚 副曰卑奴母離 有二萬餘戶 東行至不彌國百里 官曰
多模 副曰卑奴母離 有千餘 家 南至投馬國 水行二十日 官曰彌彌 副曰彌彌那利 可
五萬餘戶 南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次曰彌馬升
次曰彌馬獲 支 次曰奴佳鞮 可七萬餘戶 自女王國以北 其戶數道里可得略載 其餘旁
國遠絕 不可得詳 次有斯馬國 次有已百支國 次有伊邪國 次有都支國 次有彌奴 國
次有好古都國 次有不呼國 次有姐奴國 次有對蘇國 次有蘇奴國 次有呼邑國 次有華
奴蘇奴國 次有鬼國 次有爲吾國 次有鬼奴國 次有邪馬國 次有躬臣國 次有巴厘國
次有支惟國 次有烏奴國 次有奴國 此女王境界所盡 其南有狗奴國 男子爲王 其官有
狗古智卑狗 不屬女王 自郡至女王國萬二千餘里
男子無大小皆黥面文身 自古以來 其使詣中國 皆自稱大夫 夏後少康之子封於會稽
斷發文身以避蛟龍之害 今倭水人好沈沒捕魚蛤 文身亦以厭大 魚水禽 後稍以爲飾

諸國文身各異 或左或右 或大或小 尊卑有差 計其道里 當在會稽 東冶之東 其風俗
不淫 男子皆露紒 以木綿招頭 其衣橫幅 但結 束相連 略無縫 婦人被發屈紒 作衣如
單被 穿其中央 貫頭衣之 種禾稻 紵麻 蠶桑 緝績 出細紵 縑綿 其地無牛馬虎豹羊
鵠 兵用矛 楯 木弓 木弓 短下長上 竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與儋耳 硃崖同 倭地
溫暖 冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室 父母兄弟臥息異處 以硃丹塗其身體 如中國用粉也
食飲用籩 豆 手食 其死 有棺無槨 封土作塚 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣
他人就歌舞飲酒 已葬 舉家詣水中澡浴 以如練沐 其行來渡海詣中國 恆使 一人 不
梳頭 不去蟣虱 衣服垢汙 不食肉 不近婦人 如喪人 名之爲持衰 若行者吉善 共顧其
生口財物；若有疾病 遭暴害 便欲殺之 謂其持衰不謹 出 真珠 青玉 其山有丹 其木
有柟 杼 豫樟 楸 檉 投櫃 烏號 楓香 其竹筱簞 桃支 有薑 橘 椒 蘘荷 不知以爲滋
味 有獼猴 黑雉 其俗舉事行來 有所雲爲 輒灼骨而蔔 以占吉凶 先告所蔔 其辭如
令龜法 視火坼占兆 其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒 〈魏略曰：其俗不知正歲
四節 但計春耕秋收爲年紀〉 見 大人所敬 但搏手以當跪拜 其人壽考 或百年 或八
九十年 其俗 國大人皆四五婦 下戶或二三婦 婦人不淫 不妒忌 不盜竊 少諍訟 其犯
法 輕者沒其妻 子 重者滅其門戶 及宗族尊卑 各有差序 足相臣服 收租賦 有邸閣國
國有市 交易有無 使大倭監之 自女王國以北 特置一大率 檢察諸國 諸國畏憚 之 常
治伊都國 於國中有如刺史 王遣使詣京都 帶方郡 諸韓國 及郡使倭國 皆臨津搜露
傳送文書賜遺之物詣女王 不得差錯 下戶與大人相逢道路 逡巡 入草 傳辭說事 或蹲
或跪 兩手據地 爲之恭敬 對應聲曰噫 比如然諾

其國本亦以男子爲王 住七八十年 倭國亂 相攻伐歷年 乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼 事鬼道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國 自爲王以來 少有見者 以婢千人自侍 唯有男子一人給飲食 傳辭出入 居處宮室樓觀 城柵嚴設 常有人持兵守衛 女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種 又有侏儒國在其南 人長三四尺 去女王四千餘里 又有裸國 黑齒國復在其東南 船行一年可至 參問倭地 絕在海中洲島之上 或絕或連 周旋可五千餘里

景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都 其年十二月 詔書報倭女王曰：「制詔親魏倭王卑彌呼：帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米 次使都市牛利奉汝所獻男生口四人 女生口六人 班布二匹二丈 以到 汝所在逾遠 乃遣使貢獻 是汝之忠孝 我甚哀汝 今以汝爲 親魏倭王 假金印紫綬 裝封付帶 方太守假授汝 其綬撫種人 勉爲孝順 汝來使難升米 牛利涉遠 道路勤勞 今以難升米爲率善中郎將 牛利爲率善校尉 假銀 印青綬 引見勞賜遣還 今以絳地交龍錦五匹

〈臣松之以爲地應爲緋 漢文帝著皁衣謂之弋緋是也 此字不體 非魏朝之失 則傳寫者誤也〉 絳地縹粟罽十張 蒨絳五十匹 紺青五十匹 答汝所獻貢直 又特賜汝紺地句文錦三匹 細班華罽五張 白絹五十匹 金八兩 五尺刀二口 銅鏡百枚 真珠 鉛丹各五十斤 皆裝封付難升米 牛利還到錄受 悉可以示汝國中人 使知國家哀汝 故鄭重賜汝好物也」

正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯俊等奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王 並齎詔賜金 帛 錦罽 刀 鏡 采物 倭王因使上表答謝恩詔 其四年 倭王復 遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等

八人 上獻生口 倭錦 絳青縑 綿衣 帛布 丹木 犬付 短弓矢 遣塞曹掾史張政等因齋
詔書 黃幢 拜假難升米爲 檄告喻之 卑彌呼以死 大作塚 徑百餘步 徇葬者奴婢百餘
人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王
國中遂定 政等以檄告喻壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還 因
詣台 獻上男女生口三十人 貢白珠五千 孔青大句珠二枚 異文雜錦二十匹 掖邪狗等
壹拜率善中郎將印綬

付録 2 作業仮説候補 5.1 への補足

5.3 節で次の作業仮説候補を作業仮説候補 5.1 として準備していたが、忘れていた。

“旧作業仮説候補 5.1 高句麗にいた倭奴部は、新の高句麗侵略に伴い、倭の南端に倭奴を造った。ここで海運に従事していた。聖徳太子の頃か白村江敗戦後に東に移動し、全部か一部かは明日香に至った。”

もう少し考察しようとしておいたことを、校正の対象から削除してしまったことによる。時間が過ぎるとますます忘れてしまうので、覚えている考察に手を加えて補足とすることにした。

5.3 節より要点を抜き出す。

後漢書高句麗条と三国志高句麗条の記事に

“高句麗には涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部の五族がいた。また、本は涓奴部の王であったが、いささか弱く、今は桂婁部の王に代わっている。”

という文がある。文中の今は後漢で本は前漢で、間に新による攻略を受けた。内容に関して、次の2つの疑問を設定した。

疑問 5.1. 倭國者 古倭奴國也 とはどのようなことであろうか。

疑問 5.2. 高句麗の部の ○奴族名 ○奴 と 倭奴(委奴) とは関係があるのだろうか。

この2つの疑問の前に、五族の名前が涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部という部分で、○奴部が4つと桂婁部である。また、王の出身は本は涓奴部で今は桂婁部ということである。

ここで、志賀島で発見された金印の文字が‘漢委奴国王’であることは5.3節で述べた。

ピンイン 濊: wèi、倭: wō、委: wěi、我: wǒ

涓: juān、絶: jué、順: shùn、灌: guàn、桂婁: guī lóu

邪馬壹: xié mǎ yī、邪馬台: xié mǎ tái、邪馬臺: xié mǎ tái

本は涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 委奴部の五部で、委奴部が何処かで抜けて桂婁部替り高句麗王となったということが成り立たないかということが頭に浮かぶ。

4.6節で引用したWikipedia「玄菟郡」の記事から、高句麗に関する部分を抜き出してみる。

始元五年 BC82: 真番郡・臨屯郡が廃止された。遼東郡の東から北に玄菟郡を置き、高句麗とその北・東にいる東夷を担当させた。玄菟郡の郡治

は夫租県から変わって高句麗県(現在の吉林省集安市通溝郷)に移された。楽浪郡に朝鮮半島の東夷を担当させた。

元鳳6年 BC75: 玄菟郡は西へ縮小移転された。郡治の高句麗県は現在の遼寧省撫順市内の東部、新賓満族自治県永陵鎮老城村(昔の興京)付近へ移され、元の場所には高句麗侯が冊封された。

始建国4年 12(新): 王莽が高句麗を下句麗へ改名した。

永初元年 107: 遼東郡北部都尉の管轄区を遼東郡から切り離して新しく玄菟郡とし、遼東郡

に隣接していた旧玄菟郡を廃止、高句麗による領有を許可した。郡治の高句麗県は現在の瀋陽に遷された。

元鳳6年 BC75 に高句麗侯が冊封されたことをもって高句麗の建国という記事を見達気もするが、冊封＝建国 では傀儡政権のような気もする。

作業仮説候補 5.1 の状況証拠やそれを示唆する記事は見つけれられないような気がする。

作業仮説候補 5.1 からはつぎの2つについては説明ができるかもしれないと思っている。実際には、この2つに加えて金印の文面を考えていたが、殆ど手掛かりが無かった。今回、正史の高句麗の記事を見ている

うちに、五部族の記事を眺めているうちに、作業仮説候補を思いついた。この仮説からは、幾つかの疑問が関連付けられて説明できることが期待できる。

1つは、旧唐書倭国条での“倭國は古の倭奴國である” 倭國者 古倭奴國也 と新唐書の“日本は古の倭奴である” 日本 古倭奴也。

もう1つは、1972年に発見された高松塚古墳における極彩色の女子群像の服装壁画は、高句麗古墳の愁撫塚や舞踊塚の壁画の婦人像の服装と相似することが指摘されている。また、近くのキトラ古墳の星縮図も同様の指摘がなされている。

作業仮説候補 5.1 から候補を外すには、倭奴それなりに状況証拠を集めていくしかない。これは出来るかどうかは自信がないが、念頭において、ネタを集めていくことにする。拾い集めたネタとこれに対する感想などで文章化できたものは‘作業仮説候補?? への補足’として行く予定である。

👉 倭國者 古倭奴國也 と 日本 古倭奴也 を見たときには本当かと思った。また、これからは‘倭奴’を‘倭の奴’とは読み難い気がした。本稿の

立場からはこの記事を無視することはできない。とすれば、“唐書に突然現れるのは何故か”という疑問が残る。作業仮説 5.4 を考慮すれば、上の記事から、唐の時代の“倭王は倭奴の末裔である”と解釈できるのではないかと考える。また、唐より前はほかの部族(あるいは国)から王が選ばれていたことになる。王朝の交替があったともいえる。

👉 委奴部が最南端に逃れ、倭奴国を造ったとすれば、逃走の手段は船であったと思われる。その後、海軍(海運)に就いていた。

👉 委奴を濊奴と読み替えれば、高句麗の東部にいたとも思われる。

平壤の東側の海岸地帯は、臨屯郡廃止後は楽浪東部都尉を置き、不耐城を治所として嶺東七県(東曠県・不耐県・蚕台県・華麗県・耶頭味県・前莫県・夫租県)に分けて治めさせた。後に、東濊や不耐濊ともいわれているのではないか。

👉 200 年代に公孫氏による追討を受けた。

公孫度は東明王の子孫の仇台に娘を嫁がせた。

公孫康は、楽浪郡 18 城の南半、屯有県(現・黄海北道黄州か)以南を割いて帯方郡を分置した。その正確な時期は不明であるが早ければ建安 9 年 204 頃かともされる。

”是後倭韓遂屬帶方”『三国志』魏書 東夷伝韓条

Wikipedia「公孫康」、Wikipedia「公孫淵」、『三国志』魏書八 公孫度伝、

Wikipedia「毋丘儉」

正始年間、1 万の兵を率いて高句麗平定に出陣。句麗王の位宮率いる 2 万の兵と梁口で戦い、勝利を収める。敗走する位宮を追撃して句麗の都を破壊し、四桁に上る首級と捕虜を得る。位宮は妻子のみを連れて逃げ隠れた。翌年に再度の征伐が行われると、位宮は買溝まで逃走。

👉 高句麗は隋に攻められたが、これには耐えたが、唐により滅ぼされた。この後、倭(百済連合軍)は唐(新羅連合軍)に破れ、朝鮮半島から撤退することになる。

高句麗古墳について調べてみた。

👉 高句麗壁画古墳メモ

北朝鮮の南西部 帯方郡

安岳 3 号墳 黄海南道 墓主像や夫人像や往時の生活風俗

河西大墓 南浦特別市 四神図

平壤市

高山洞 1 号墳 四神図

Wikipedia「帯方郡」

公孫康は、楽浪郡 18 城の南半、屯有県(現・黄海北道黄州か)以南を割いて帯方郡を分置した。その正確な時期は不明であるが早ければ建安 9 年(204 年)頃かともされる。これにより南方の土着勢力韓・濊族を討ち「是より後、倭・韓遂に帯方に属す」という朝鮮半島南半の統治体制を築く。

👉 今のところ、ざっと見たところで、四神図や人物像で見つけたのはこの程度である。あと星縮図のある古墳を見つけることが必要である。

黄海南道や南浦特別市は、南北朝鮮の国境線の西側海岸部の北側である。

漢四郡については 4.5 節で触れた。覚えていることを主に少しまとめてみる。大きな記事はつぎの 4 つである。

戦国時代、燕が上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡を設置した。

元朔元年 BC128 東夷の蕞君である南閭らが投降した。そこを蒼海郡とした。三年 BC126 蒼海郡を廃棄した。

元狩4年 BC119 伊稚斜単于は衛青と霍去病の侵攻に遭って大敗し、漠南の地（内モンゴル）までも漢に奪われてしまう。

元封二年 BC108 朝鮮はその王の右渠を斬り投降した。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。元封四年 BC107 高句麗を県とし、玄菟郡の下に置いた。

始元5年 BC82 に漢四郡のうち真番郡・臨屯郡が廃止された。

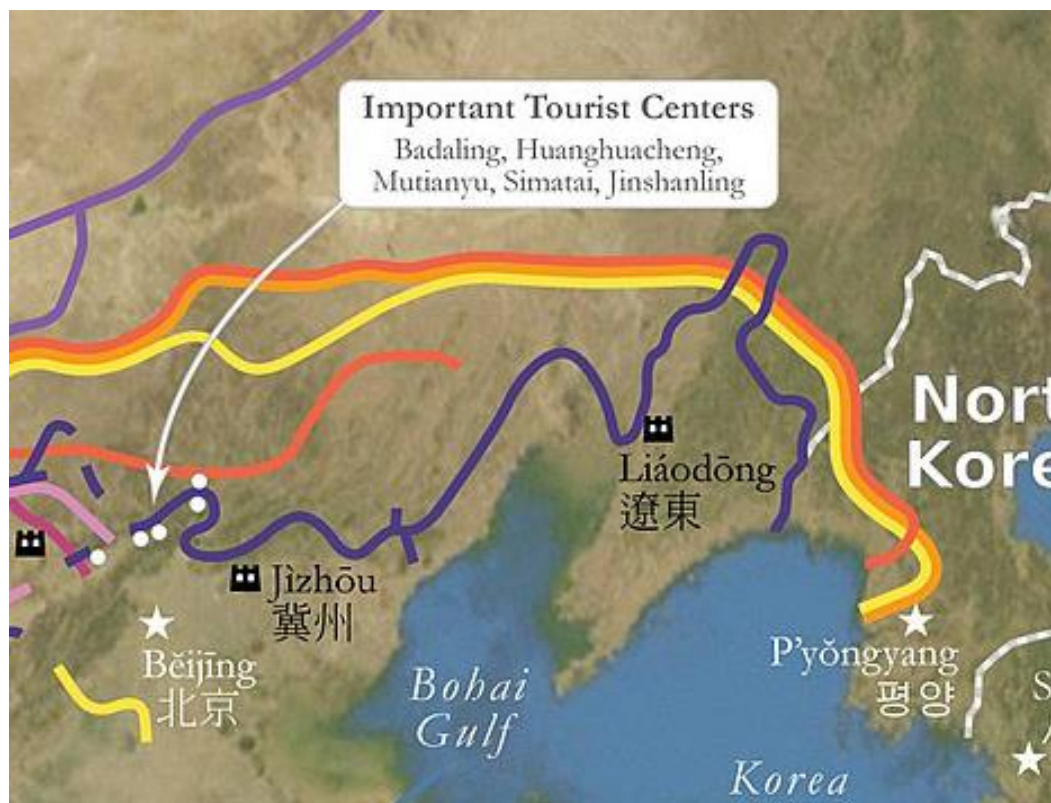


図 7.13 燕秦の万里の長城

👉 図 7.??は Wikipedia「万里の長城」にあった地図の一部である。オレンジ色が漢のもので、黄色く見える部分が魏超秦燕によるものということである。遼西遼東 2 郡の北は両者一致しているようだ。

燕が設置した 4 郡は長城の内側に含まれているようだ。この範囲は直轄地としての体制も整い、反乱の恐れもないと判断されたということであろう。あるいは、移住した漢民族が大勢を占め、本からいた人は長城の外に移住したことも考えられる。一方、長城を超すには幾つか造られた門を通るしかない。これは、長城外にも街道や宿場町を通る効果があったと思われる。

紀元前 120 年ごろまでは漢は匈奴に悩まされてきた。これが、衛青と霍去病の 2 将軍らの活躍により外患が取り除けられたということになっている。

👉 初めは後背地が広がっているとして、楽浪 臨屯 玄菟 真番の 4 郡を設置した。大まかな配置は、遼東郡の東、北朝鮮の西部分に楽浪郡があり、楽浪郡の北の西側に玄菟郡、北から東沿海部(超 h 区山脈の東)に臨屯郡、南に真番郡である。楽浪郡を後背地とし北東南を支配するように見える。時間がたつに伴い、臨屯・真番の 2 郡の地には漢に歯向かうような勢力は無く郡とするほどのちではなかったことがわかり廃止となっ

た。玄菟郡が残ったのは高句麗対策というのを見た記憶があるが、その時は漠然とそうかなと思った。ところが、この玄菟郡の再編中に高句麗侯が選定され、前漢の間は高句麗侯のままであった。高句麗(玄菟郡)の位置は、図 4.1 東アジアの山脈で、長白山脈の‘山脈’部分辺りで、ここには順炭鉱や鞍山の鉄鉱石鉱山がある。この鉄を確保することならば、郡を設置する意味があると思う。

ここで現在考えている作業仮説候補を述べておく。

“作業仮説候補 5.1 高句麗にいた倭奴部は、新の高句麗侵略に伴い、倭の南端に倭奴国を造った。ここで海運に従事し、倭連合王国の構成国となった。その後、中国王朝による征討を受けるたびに倭国や倭奴国に移住する氏族が現れた。陸続きの新羅には住民も移住したことは想像できる。中国王朝による征討としては、紀元前後の新によるもの。3世紀に、公孫氏によるものと毋丘儉によるものがあった。最終的には、7世紀に唐により滅ぼされた。”

なお、唐により百済も滅ぼされた。倭も朝鮮半島から撤退することになった。